アジア・アフリカ言語文化研究所
東京外国語大学

RESEARCH INSTITUTE FOR LANGUAGES AND CULTURES OF ASIA AND AFRICA
TOKYO UNIVERSITY OF FOREIGN STUDIES



要覧 2005

目　　次

概　要

所長あいさつ …… 1
沿革 …… 2
研究所組織 …… 4
研究組織構成 …… 5
研究活動の構成 …… 6
研究スタッフ …… 7
運営諮問委員会･共同利用委員会･編集委員会… 14
外部資金受入状況 …… 15
情報資源利用研究センター（IRC） …… 16
フィールドサイエンス研究企画センター（FSC）… 18

共同利用

共同研究プロジェクト …… 19
国際シンポジウム …… 32
外国人研究者招へい …… 34
外国研究機関との共同研究 …… 35
図書資料コレクション …… 37

研究・教育活動

競争的研究経費などによる研究 …… 38
アジア書字コーパス拠点（GICAS） …… 40
資源人類学プロジェクト …… 41
長期研究者派遣 …… 42
言語研修 …… 43
音声学解析 …… 44
大学院 …… 45
学振特別研究員 …… 46
研究成果の公開 …… 47
出版事業・ホームページ …… 48

表紙の写真

マリン・ブルーのメディナ：国際アンダルシア音楽祭が開催されるシェフ・シャウエンはモロッコのリーフ山脈にふわりと降り立ったような小さな町である。アラビア語やフランス語よりもスペイン語が通じるこの町のメディナ（旧市街）はフェズなどと比べるとかなり小さいが、心を休ませるパステル風の青色に染め上げられている。（モロッコ王国シェフ・シャウエン市、2000年7月1日、小田淳一所員撮影）

RESEARCH INSTITUTE FOR LANGUAGES AND CULTURES
OF ASIA AND AFRICA
TOKYO UNIVERSITY OF FOREIGN STUDIES

3-11-1, ASAHI-CHO, FUCHU-SHI, TOKYO 183-8534
TEL: 042-330-5600　FAX: 042-330-5610

概　要

所長あいさつ



本研究所は、アジア・アフリカの言語文化に関する総合的研究を目的とする大学間の共同利用研究所として1964年に設置され、これまでの40年間、国内外の共同研究や海外調査の組織化、研究資料の蓄積と公開、言語研修、辞典編纂などを通じて、この分野における主導的な役割を果たしてきました。現在、所員のそれぞれは、依然として研究の進んでいない部分の多いアジア・アフリカの諸言語や文化に関する研究を進めて知識の集積を図りつつ、こうした実証的な研究に基づいて新たな時代にふさわしい知的枠組みを形成することを目指しています。

「グローバル化」という言葉に代表されるように、世界が今や一体のものであるという理解は定着したと言って良いでしょう。しかし、こうした一体性は世界各地の言語や文化が画一化することや、特定の文化的価値を奉じる集団が独占的な優位を占めることを意味するものではありません。現実の世界は多様性に富んでおり、また「地球化」にともなう異なる文化の接触によって、さまざまな地域で新たな文化が生成されてもいます。人類は種としての共通基盤の上に多様性に富む諸文化を生み出してきましたが、そうした生成の過程が激化していると言うこともできます。このような状況下で地球上の人類が共生を達成するためには、差異についての相互理解が不可欠であり、そのためには人類の社会生活の基礎を成す言語、文化に関する個別的な研究と普遍的な研究の双方からのアプローチが必要とされます。フィールドワークに基づく実証研究と、地域を基盤とした新たな知的枠組みの形成を目指す本研究所の役割は、ますますその重要性を増しつつあると考えます。

本研究所は国立大学法人としての東京外国語大学に附置されておりますが、全国共同利用研究所としての機能を一層強化し、組織の枠を越えて国内外の研究者に広く開放された活動を展開することによって、学術研究の本来の姿である開かれた知の拠点を構築すべく努力する所存です。今後も研究者コミュニティおよび国内外社会のみなさまのご指導ご支援をお願い申し上げます。



東京外国語大学
アジア・アフリカ言語文化研究所
所長　**内堀　基光**

沿革

第二次世界大戦後、バンドン会議などを通じて、日本の将来にとって、アジア・アフリカ諸国との相互理解、相互協力を進めていくことの重要性が認識されるようになりました。そこで、1961（昭和36）年、日本学術会議はこれら諸国についての研究を進めるための共同利用研究所を設立するよう政府に勧告し、1964（昭和39）年に、アジア・アフリカ言語文化研究所が、わが国では初めての人文科学・社会科学系の共同利用研究所として東京外国語大学に附置されました。

共同利用研究所としての本研究所は、全国のあるいは海外の研究機関に属する専門の研究者とともに共同研究を行い、これらの学者に設備や資料を提供することなどを通して、日本あるいは世界における人文・社会科学の研究の進展に寄与することを使命としてきました。

発足当初、本研究所ではアジア・アフリカの個別の地域についての深い理解を目指し、言語学・歴史学・民族学などの視点から密度の濃い研究がなされました。しかし、設立30年後には、既存の学問体系に依拠した個別的な研究分野を乗り越えた新しい学問・理論構築への要請が高まり、また情報処理技術の発達の中で、文字のみならず音声や画像を処理し、さらにこれらをひとつの情報ネットワークに統合化する研究が急速に進展してきたことを受けて、このような内外の情勢に対応し、学問研究においてより先導的な役割を果たすことが求められるようになりました。このため、1991年に研究所では、研究体制の抜本的見直しをおこない、従来の小部門制（及び1客員部門）から4大部門制（及び1客員部門）をとることとなりました。4大部門制では、言語を媒介として成立している文化を総合的に研究する体制を整え、また広域的なフィールドワークや共同研究を通して、幅広い研究者の英知を結集した研究、情報の統合的処理の理論と方法の開発を目指しました。情報ネットワーク化の目覚しい技術革新に関しては、これを活用したアジア・アフリカの言語文化資料の情報資源化をめざし、1997（平成9）年度より附属情報資源利用研究センターを設置し、共同利用研究所に更なる発展をもたらしています。

1995（平成7）年度には、本研究所は文部省から「卓越した研究拠点（COE）」に指定され、「中核的研究機関支援プログラム」のもとで、設備の充実、国際シンポジウムの開催、研究資料のデータベース化とその発信などにつとめてきました。加えて、2001（平成13）年度には、5年にわたる中核的研究拠点形成プログラム（2002（平成14）年度からは、文部科学省科学研究費補助金特別推進研究に移行）「アジア書字コーパス拠点」が新たに発足し、従来にもましてアジア・アフリカ地域の言語文化研究において先導的役割を果たすことになりました。

2002（平成14）年度からは、文部科学省科学研究費補助金・特定領域研究「資源の配分と共有に関する人類学的統合領域の構築－象徴系と生態系の関連をとおして－」が発足しました。このプロジェクトでは、国内外の諸機関に属する多くの人文社会科学の研究者が参加することにより、人類社会における広義の資源の生成循環を考察し、近代社会の資源をめぐる諸問題に対する新たなパースペクティブを提供することを目指しています。

この他、1992年には、東京外国語大学に大学院地域文化研究科博士後期課程が設置されましたが、本研究所でも多くの教官がこれに加わり、本研究所の精神を受け継ぐ次世代の優秀な研究者の育成にも取り組んでいます。2002（平成14）年度には、21世紀COEプログラムとして地域文化研究科では、「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」および「史資料ハブ地域文化研究拠点」の2つのプログラムが採択され、本研究所の大学院担当教員も、これらの拠点の形成に寄与しています。

さて、2004年4月の国立大学法人化に際し、本研究所に対してこれまで以上に、日本のそして国際的な人文社会科学研究をリードする研究拠点としての役割を強化していく期待が寄せられていることに鑑み、本研究所では、これまでの設置目的をさらに発展させて、以下の基本目標を掲げることとしました。

(1) 臨地研究（フィールドサイエンス）を核とした国際的研究拠点として国際的水準の研究を先導するにふさわしい研究領域を設定し、国内外の共同研究プロジェクトを推進する。

(2) アジア・アフリカ諸地域の言語・文化等に関する研究資料・情報を研究資源として利用可能な形に編纂し、それを国際的に共有するための研究資源拠点としての活動を進める。

(3) 国内外の後継研究者の養成に努めるため、研究所の創設以来の歴史を持つ言語研修・研究技術研修・出版・広報活動の、いっそうの充実を図る。

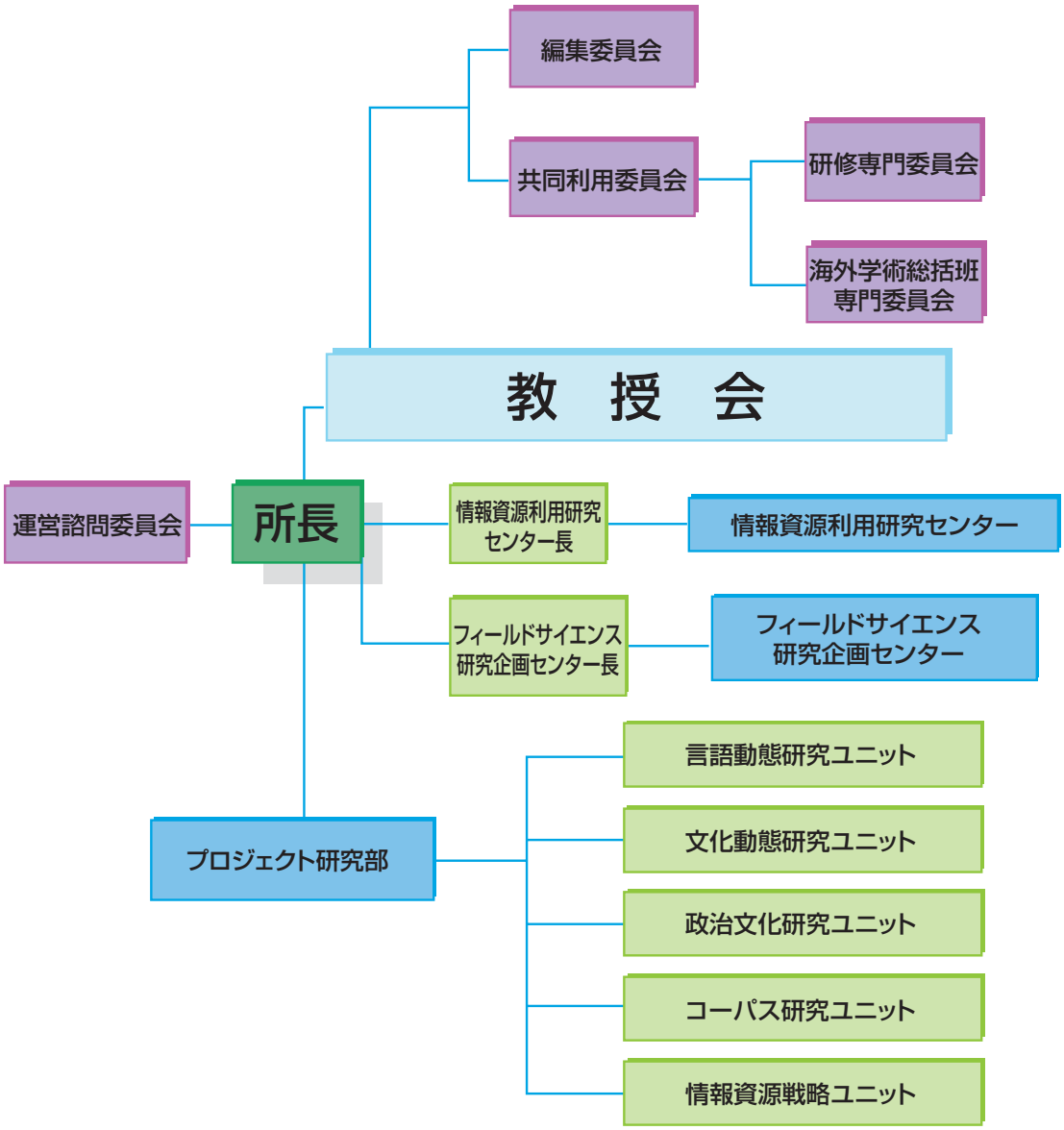
上記の基本的な目標の達成に資するために、所員の組織配置が固定化しがちであった従来の部門制を廃し、本年４月に中期目標・計画に従って機動的に現下の研究課題に協力して取り組むべく、複数の研究ユニットからなるプロジェクト研究部を設置しました。これと同時に、フィールドサイエンス企画研究センターを新たに設置し、臨地研究という視点から、国内外の一線の研究者を糾合した研究および研究企画を行っていきます。また、全国の地域研究者のネットワーク形成に寄与すべく、2004年に発足した地域研究コンソーシアムの拠点組織として、その運営に積極的に取り組んでいます。

以上のいくつかの新しい試みを通して、本研究所は、これからもアジア・アフリカ世界に関する新たな認識枠組みの提供のための基盤形成に寄与するべく、よりいっそう活発な研究活動を展開していく決意です。

歴　代　所　長

岡　正雄	1964 － 1972 年
徳永康元	1972 － 1974 年
北村　甫	1974 － 1983 年
梅田博之	1983 － 1989 年
山口昌男	1989 － 1991 年
上岡弘二	1991 － 1995 年
池端雪浦	1995 － 1997 年
石井　溥	1997 － 2001 年
宮崎恒二	2001 － 2005 年
内堀基光	2005 年－現在

研究所組織



（2005 年 4 月現在）

区　分	教　授	助教授	助　手	計
現　員	(5) 19	16	5	(5) 40

（　）は外国人客員数を外数で示す

研究組織構成

プロジェクト研究部 研究ユニット	研究活動内容	所属研究者
情報資源戦略	言語文化情報に関わる新たな情報処理システムの構築ならびに言語文化情報の提供、共同利用・公開のための手法を開発する。(IRCとの連携研究班)	町田、バースカララーオ、豊島、星、伊藤
コーパス	国内外の研究者と共同し、言語情報科学の成果を活用しつつ、アジア・アフリカの言語文化情報の分析・処理システムの構築を行うとともに、及びそれにもとづく言語文化の理論化を行う。	中谷、内堀、芝野、羽田 荒川
文化動態	国内外の研究者と共同し、人間文化のアジア・アフリカ諸社会における現実態についてフィールドワークに基づきミクロおよびマクロな観点から実証的研究を行うとともに、人類史的視野の中で文化の理論的探究を行う。	小川、深澤 高知尾、西井 ラザフィアリヴニ・ミッシェル(客員)
政治文化	国内外の研究者と共同し、通時的視点から国家と地域における政治をその背景を成す文化の分析を通じて明らかにする。	根本、中見、ダニエルス 永原、太田
言語動態	国内外の研究者と共同し、フィールドワークの成果に基づく実証的研究を基盤として、言語記述の方法論に関する根幹的な研究を推進する。	新谷、加賀谷、中山、 呉人、澤田、塩原 ムクデ・ダニエル・ジョセフ(客員) モティンゲア・アンドレ・マングル(客員)

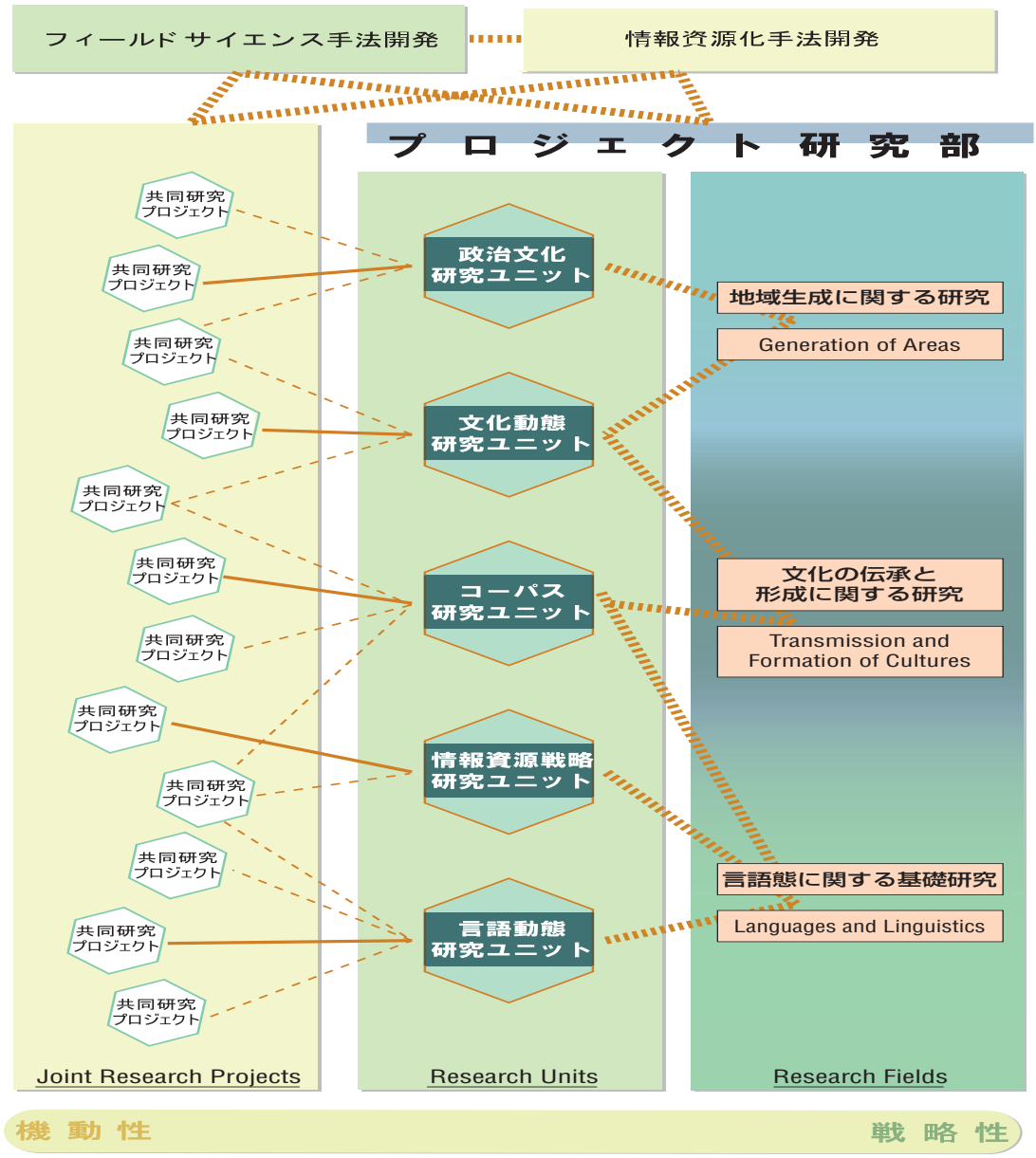
情報資源利用研究センター	アジア・アフリカ言語文化に関する情報資源の蓄積・加工・公開と、それを活用した共同研究手法の開発・国際学術交流を推進する。	峰岸、栗原、高島 小田、三尾、陶安 ヴィッツェル・マイケル(客員)
フィールドサイエンス研究企画センター	フィールドサイエンスに関わる研究者ネットワークならびにノリッジベースを構築するとともに、フィールドサイエンス技法に関する手法開発、研修等を行う。また、他機関と連携し、人間が活動し、社会環境を成り立たせる場として地域の生成過程のダイナミズムを研究し、現代のアジア・アフリカで生起する諸問題に対し、時間軸を重視しつつ複眼的視座を提供する。	黒木、石井、宮崎、大塚 河合、真島、近藤、飯塚、 床呂、 ベンハッダ・アブデルラヒーム(客員)

研究活動の構成

AA研は、法人化のもとで掲げた長期的な基本的な目標（沿革参照）を遂行するために、三つの戦略的な研究軸に基づいて、動態的な研究活動を推進します。すなわち、三つの研究軸を具体化させた中期計画・中期目標に基づいて、所員が活動の単位である「ユニット」に所属し、所内での共同研究を実施します。

さらに、「ユニット」の活動にふさわしい「共同研究プロジェクト」を立ち上げることによって、国内外のそれぞれの研究領域において最先端の研究を行っている研究者を共同研究員として委嘱し、アジア・アフリカの言語・文化についての先導的な共同研究を推進します。情報資源利用研究センターに所属する所員は、ユニットに関わる所員と同様に、共同研究を展開するとともに、所内外の研究における情報資源の蓄積・加工・公開と、それを利用した共同研究手法の開発も行います。フィールドサイエンス研究企画センター所属の所員も、共同研究のほかに、現地研究を主体とするフィールドサイエンスの視点から、研究および研究企画を行っていきます。

AA研の研究活動概念図



研究スタッフ

1．研究分野・領域　2．今年度の研究課題　3．ホームページ

教　　授

（2005年4月現在）

石井　溥（ISHII, Hiroshi）

1．南アジアの人類学
2．ⅰ．ネパールの社会変化および民族・カースト間関係研究　ii．北部南アジアの社会動態研究　iii．海外学術調査・フィールドワークの手法研究　iv．人文学分野に関する学術動向及び学術振興方策に関する調査・研究（受託研究・学術振興会）
3．http://www.aa.tufs.ac.jp/~hishii/index.html

内堀　基光（UCHIBORI, Motomitsu）

1．東南アジア（オーストロネシア）民族学
2．社会文化人類学
ⅰ．マダガスカルにおける森の文化的意味の研究（科学研究費補助金）　ii．資源に関する人類学的総合研究（特定領域科学研究費補助金）
3．http://www.aa.tufs.ac.jp/~muc/

大塚　和夫（OHTSUKA, Kazuo）

1．社会人類学、中東民族誌学
2．ⅰ．中東を中心としたムスリム社会の人類学的研究
ii．人類学的部族・民族概念の検討

小川　了（OGAWA, Ryo）

1．西アフリカの民族学
2．アジア・アフリカにおける小生産物の研究

加賀谷　良平（KAGAYA, Ryohei）

1．アフリカの言語学（バントゥ諸語、コイサン諸語）、音声科学
2．ⅰ．ウガンダのバントゥ諸語の分析　ii．バントゥ諸語と日本語アクセントの比較研究とその弁別特徴の研究　iii．語彙集の作成

クリスチャン・ダニエルス（DANIELS, Christian　漢名　唐立）

1．中国西南部：タイ文化圏の歴史
2．ⅰ．「西南中国非漢族の歴史に関する総合的研究」プロジェクト（AA研共同研究プロジェクト）　ii．「雲南におけるタイ文字文献の調査と保存プロジェクト－臨滄地区」（トヨタ財団）　iii．知識資源の共有と秘匿（特定領域科学研究費補助金）　iv．「雲南歴史班－アジア熱帯モンスーン地域における地域生態史の総合的研究」（総合地球環境学研究所研究プロジェクト）

栗原　浩英（KURIHARA, Hirohide）

1. ベトナム現代史
2. ⅰ．第二次世界大戦直後におけるソ連勢力圏の形成とスターリンの対外認識（科学研究費補助金）　ii．インターナショナリズムの史的研究　iii．インドシナにおける越境交渉と複合回廊の展望

黒木　英充（KUROKI, Hidemitsu）

1. 中東地域研究・東アラブ近代史
2. ⅰ．オスマン期シリアの都市社会の変容過程に関する基礎研究　ii．東地中海地域における人間移動と民族・宗派対立（科学研究費補助金・AA研共同研究プロジェクト）　iii．地域研究による「人間の安全保障学」の構築（日本学術振興会委託研究）
3. http://www.aa.tufs.ac.jp/~kuroki/

芝野　耕司（SHIBANO, Kohji）

1. マルチメディアデータベース、多言語情報処理、CALL
2. マルチメディアデータベース言語設計、日本語組版、コンピュータ支援による言語教育環境及びe-learning環境の研究

新谷　忠彦（SHINTANI, Tadahiko L.A.）

1. 言語音変化の類型的研究
2. ⅰ．シャン文化圏の総合的研究　ii．オセアニア諸語の研究

高島　淳（TAKASHIMA, Jun）

1. 宗教学・インド宗教史（ヒンドゥー教）、言語情報処理
2. ⅰ．シヴァ教の寺院儀礼と思想についての研究　ii．多言語処理システムの開発研究　iii．インド聖典データベースの構築　iv．インド系文字の発展に関する研究　v．中世インドのヒンドゥー教タントリズムと諸宗教のかかわりについての研究
3. http://www.aa.tufs.ac.jp/~tjun/index.html

中谷　英明（NAKATANI, Hideaki）

1. インド仏教学・中期インド語学・総合人間学
2. ⅰ．インド古典文献学：インド古典語・中期インド語・インド古典韻律の研究　ii．インド古代思想研究：バラモン教・インド仏教の哲学的・思想的解明（科学研究費補助金）　iii．総合人間学：地球文明時代の世界理解と新しい倫理・人間観の研究（AA研共同研究プロジェクト）

中見　立夫（NAKAMI, Tatsuo）

1. 東アジア・内陸アジアの国際関係史
2. ⅰ．「東アジアの社会変容と国際環境」プロジェクト（AA研共同研究プロジェクト）　ii．台湾中央研究院歴史語言研究所所蔵満洲語文書の研究（中央研究院歴史語言研究所）　iii．日露戦争が東アジア社会・国際関係に与えた影響に関する研究（慶應義塾大学アジア研究所）　iv．東アジア文書史料の電子化（GICAS：特別推進研究（COE））

根本　敬（NEMOTO, Kei）

1. ビルマ近現代史
2. ⅰ.「日本占領期ビルマ（1942–45年）に関する総合的歴史研究」（AA研共同研究プロジェクト・トヨタ財団計画助成研究）主査としての成果刊行物出版準備　ii.「ビルマ地誌データベース構築」への取り組み　iii. ビルマ・ナショナリズムの展開（GCBA、タキン党、日本占領期）に関する継続的史料調査
3. http://coe.aa.tufs.ac.jp/knemoto/

羽田　亨一（HANEDA, Koichi）

1. サファヴィー朝期イラン文化史
2. ⅰ.『ロスタム･ハーン史』の研究　ii. ラシードゥ・ウッディーン序・監修『タンスーク・ナーメ』（王叔和『脈訣』のペルシャ語訳本）の研究　iii.「ペルシア語文化圏に於ける文字資料の収集と収集資料のデジタル化」（GICAS：特別推進研究（COE））

ペーリ・バースカララーオ（BHASKARARAO, Peri）

1. 南アジアの諸言語、音声学
3. http://www.aa.tufs.ac.jp/~bhaskar/index.html

町田　和彦（MACHIDA, Kazuhiko）

1. 南アジアの言語学
2. ⅰ. インド系文字の構造と歴史（GICAS：特別推進研究（COE））　ii. ヒンディー語電子辞書（GICAS）
3. http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/

峰岸　真琴（MINEGISHI, Makoto）

1. 東南アジア、南アジアの言語学および言語類型論
2. ⅰ. 孤立語を視野に入れた言語基礎論・言語類型論の研究　ii. コミュニケーションとその障害に関する研究　iii. タイ系、クメール系など、東南アジアのインド系文字に関する研究（GICAS：特別推進研究（COE））　iv. タイ、インドの少数民族言語の研究　v. 言語運用を基盤とする言語情報学拠点（東京外国語大学21世紀COEプログラム）
3. http://www.aa.tufs.ac.jp/~mmine/index-j.html

宮崎　恒二（MIYAZAKI, Koji）

1. オーストロネシア社会
2. ⅰ. 国際移住に関する文化人類学的研究（科学研究費補助金）　ii. インドネシア文献学の研究
3. http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmiya/profile-sjis.html

助　教　授

飯塚　正人（IIZUKA, Masato）

1. イスラーム学・中東地域研究
2. ⅰ. 1990年代半ば以降のイスラーム世界におけるジハード理論の変容と実践の研究（科学研究費補助金）
   ii. 地域研究による「人間の安全保障学」の構築（日本学術振興会 人文・社会科学振興のためのプロジェクト研究事業）
3. http://www.aa.tufs.ac.jp/~masato/index.html

小田　淳一（ODA, Jun'ichi）

1. 計量文献学
2. ｉ．民話の計量的比較研究　ii．情報修辞学（AA 研共同研究プロジェクト）
3. http://www.aa.tufs.ac.jp/~odaj/index.html

河合　香吏（KAWAI, Kaori）

1. 人類学、東アフリカ牧畜民研究
2. ｉ．東アフリカ牧畜民の遊動再考　ii．ウガンダ・カラモジャの牧畜民の空間認識と地図表象化に関する調査・研究（科学研究費補助金）　iii．自然観・環境認識と身体論（AA 研共同研究プロジェクト成果の編集出版）　iv．「集団」概念の進化史的基盤研究（AA 研共同研究プロジェクト）

呉人　徳司（KUREBITO, Tokusu）

1. 言語学、チュクチ語
2. ｉ．海岸チュクチとトナカイ・チュクチに関する言語学、言語人類学的研究　ii．消滅の危機に瀕している言語に関するより効率的調査・記述方法の研究　iii．言語類型論の研究
3. http://www.aa.tufs.ac.jp/~tugusk/

近藤　信彰（KONDO, Nobuaki）

1. イラン近代史
2. ｉ．宗教寄進文書の分析による 19 世紀テヘランの都市史研究　ii．シーア派の法的勧告と法廷文書に関する研究（科学研究費補助金）　iii．ペルシア語文化圏における文字資料の収集と電子化（GICAS：特別推進研究（COE））

澤田　英夫（SAWADA, Hideo）

1. カチン州および東北インドのチベット＝ビルマ系言語の記述的研究
2. ｉ．ロンウォー（マル）語の文法記述　ii．「東南アジア諸文字の源流と発展（特にモン文字・ビルマ文字の体系や字形の変遷に関するデータベースの構築）」（GICAS：特別推進研究（COE））
3. http://www.aa.tufs.ac.jp/~sawadah/profile-sjis.htm

髙知尾　仁（TAKACHIO, Hitoshi）

1. 文化人類学・人類学精神史
2. ｉ．近代エチオピア表象論　ii．啓蒙期の言語文化表象　iii．imperium の言説と表象に関する基本研究

床呂　郁哉（TOKORO, Ikuya）

1. 東南アジア島嶼部の人類学

豊島　正之（TOYOSHIMA, Masayuki）

1. 中世日本語文献学（特にキリシタン文献）
2. ｉ．キリシタン文献活字字体のデータベース構築・維持　ii．宣教に伴う言語学（Missionary Linguistics）関連辞書・文法書統合化研究（科学研究費補助金）　iii．漢字字体史研究のための関連資料研究（GICAS：特別推進研究（COE））　iv．極初期録音音源による百年前の言語音声と書記記録との関係の研究（GICAS：特別推進研究（COE））　v．三省堂「言語学大辞典」データベース構築（科学研究費補助金）
3. http://jcs.aa.tufs.ac.jp/mtoyo/

永原　陽子（NAGAHARA, Yoko）

1. 南部アフリカの歴史・帝国主義・帝国の歴史
2. ⅰ．南部アフリカ史における「クレオール」・「人種」・「境界」の研究　ii．植民地時代のナミビア史の再構築　iii．「植民地責任」論と脱植民地化の比較史的研究（AA研共同研究プロジェクトおよび科学研究費補助金）

中山　俊秀（NAKAYAMA, Toshihide）

1. ワカシュ諸語（北米北西海岸）、形態・統語論、言語類型論
2. ⅰ．複統合性についての研究　ii．ヌートカ語テキスト資料の整理・分析・編集　iii．ヌートカ語語彙集の編集
3. http://www.aa.tufs.ac.jp/~nakayama/

西井　凉子（NISHII, Ryoko）

1. 東南アジア大陸部の人類学
2. ⅰ．南タイにおけるムスリム・仏教徒混住地域における実践宗教　ii．人類学研究における「社会空間」についての考察（AA研共同研究プロジェクト「社会空間と変容する宗教」）
3. http://www.aa.tufs.ac.jp/~rnishii/

深澤　秀夫（FUKAZAWA, HIDEO）

1. マダガスカルを中心とするインド洋海域世界の社会人類学的研究
2. ⅰ．マダガスカルにおける実地調査（科学研究費補助金「地歩独立制移行期マダガスカルにおける資源をめぐる戦略と不平等の比較研究」）　ii．マダガスカルにおける20世紀個体形成についての論文の執筆　iii．ホームページの改訂
3. http://www.aa.tufs.ac.jp/~nfuka/

星　　泉（HOSHI, Izumi）

1. チベット文化圏の言語学
2. ⅰ．チベット語辞典編纂（GICAS：特別推進研究（COE））　ii．チベット語動詞研究　iii．チベットの画像データベース構築プロジェクト（GICAS：特別推進研究（COE））　iv．古代チベット語文献オンライン（GICAS：特別推進研究（COE））
3. http://star.aa.tufs.ac.jp/

眞島　一郎（MAJIMA, Ichiro）

1. 西アフリカの人類学
2. ⅰ．文化人類学における中間集団の理論的位置づけに関する研究　ii．マルセル・モースの協同組合論に関する研究　iii．コートディヴォワール内戦における暴力の研究
3. http://www.aa.tufs.ac.jp/~imajima/

三尾　裕子（MIO, Yuko）

1. 東アジアの人類学
2. ⅰ．台湾漢人の社会変動と宗教についての研究　ii．台湾における植民地主義に関する研究（科学研究費補助金）　iii．ベトナム華人研究及び「環中国海（環シナ海）の文書史料の電子化（GICAS:特別推進研究（COE））」　iv．「中国系移民の土着化/クレオール化/華人化についての人類学的研究」（AA研共同研究プロジェクト、科学研究費補助金）
3. http://www.aa.tufs.ac.jp/~ymio/

助　　手

荒川　慎太郎（ARAKAWA, Shintaro）

1. 西夏語学、西夏語文献学
2. ⅰ．西夏語文献の言語学的研究　ii．チベット語から翻訳された西夏語仏典の研究（科学研究費補助金）

伊藤　智ゆき（ITO, Chiyuki）

1. 音韻論、歴史言語学、中期朝鮮語、中国語中古音
2. ⅰ．朝鮮漢字音の音韻研究　ii．朝鮮語真言・陀羅尼資料の分析　iii．東京大学小倉文庫所蔵朝鮮語文献の電子化（GICAS プロジェクト）　iv．中期朝鮮語アクセント辞典作成（科学研究費補助金）

太田　信宏（OTA, Nobuhiro）

1. 南アジアの歴史
2. ⅰ．近世南アジアにおける国家的儀礼と政治文化の研究　ii．南インド史上の諸社会集団の結合形態とその歴史的変遷の研究　iii．前近代カンナダ語文学作品に関する基礎的研究

塩原　朝子（SHIOHARA, Asako）

1. 言語学、インドネシア諸言語の記述的研究
2. ヌサトゥンガラ諸島の言語（バリ語、スンバワ語、クイ語（アロール）など）の記述
3. http://www.aa.tufs.ac.jp/~asako/profile-sjis.htm

陶安　あんど（SUEYASU/HAFNER, Arnd Helmut）

1. 法社会学、中国法制史と中国古文字学
2. ⅰ．秦漢刑罰体系の研究　ii．金文法制資料の研究　iii．中国古文字偏旁体系の研究



◆「ベンガル人ムスリムのモスク」
ヤンゴン市街のど真ん中、スーレー＝パゴダのすぐ北にあるベンガリ＝スンニ＝ジャメー＝モスク。付近には他にタミル人ムスリムのモスクなど3つのモスクがある。モスクの人は親切で、ムスリムでもない我々を中に招き入れ案内し、右側のミナレット（尖塔）にまで上らせてくれた。あるいは改修して日の経っていないぴかぴかのモスクを外国人に見せたかったのかもしれない。
（ミャンマー連邦・ヤンゴン、スーレー＝パゴダ通り、2005 年 1 月 10 日、澤田英夫撮影）

非常勤研究員

新井　和広（ARAI, Kazuhiro）

1. 中東研究、インド洋史
2. ｉ．20 世紀前半に東南アジアで発行されていたアラブ定期刊行物データベースの構築　ii．マナーキブを通して見たハドラミー移民の諸相に関する研究

衣笠　聡史（KINUGASA, Satoshi）

1. 生態人類学、空間情報科学
2. アジア・アフリカ地域の人間活動と環境変化
3. http://www.aa.tufs.ac.jp/~kinugasa/

宋　丕尤（SONG, Peiyou）

1. スーパーコンピュータによる分散処理
2. 多国言語 Web 辞書
3. http://www.aa.tufs.ac.jp/~song/index.html

丹菊　逸治（TANGIKU, Itsuji）

1. サハリン・アムール地域および北海道の口承文学
2. ｉ．サハリン地域のニヴフ民族の昔話・叙事詩研究。その世界観、周辺諸民族との影響関係。ii．アイヌ民族を中心とする極東諸民族の民具名称、動植物語彙の調査。iii．サハリン地域の民族音楽アンサンブル運動研究。
3. http://sakhalin.daa.jp/

長崎　郁（NAGASAKI, Iku）

1. 言語学、ユカギール語
2. ｉ．コリマ・ユカギール語の文法記述　ii．コリマ・ユカギール語資料の整理、分析　iii．ロシアにおけるソ連時代のユカギール語資料の調査



◆「シュエダゴン＝パゴダの土産物屋」
ヤンゴン市街方面へ降りる南参道階段の途中にある土産物屋の店内。数珠や仏像などの仏具のほか、財運を招くとされるつがいのフクロウや、起き上がりこぼしや、なぜかキリンやシマウマの玩具まで売っている。パゴダや寺院の参道にはこのような土産物屋・花屋・本屋などが列をなしている。
（ミャンマー連邦・ヤンゴン、シュエダゴン＝パゴダ、2005 年 1 月 10 日、澤田英夫撮影）

○運営諮問委員会

研究所の日常の業務の運営は、教授・助教授で組織する教授会においておこなわれますが、共同利用研究所としての機能を適切に遂行するために、これとは別に運営諮問委員会が置かれ、研究所の運営の基本方針など重要な事項について、所長の諮問に応えます。運営諮問委員には所外の学識経験者など15名以内が委嘱されます。2005年4月～2007年3月の運営諮問委員は現在以下の通りです。

長野泰彦（大学共同利用機関法人人間文化研究機構・理事）
渡邉興亞（総合研究大学院大学・監事）
上野善道（東京大学・大学院人文社会系研究科・教授）
原ひろ子（城西国際大学・人文科学研究科・教授）
西田利貞（財団法人日本モンキーセンター・所長）
立本成文（中部大学・国際関係学部・教授）
倉沢愛子（慶應義塾大学・経済学部・教授）
飯塚利昭（大修館書店・編集第二部・部長）
清水建宇（朝日新聞社・論説委員）
斎藤　修（一橋大学・経済研究所・教授）

○共同利用委員会

本研究所の共同利用に関して、研究者コミュニティによる透明性を持った運用体制を実現するため、所内外の委員からなる共同利用委員会が置かれています。共同利用専門委員会は、共同研究プロジェクトの事前及び事後評価、言語研修等研修事業に関わる計画立案、関連研究機関・団体との連携推進に当たります。2005年度の共同利用委員は次の通りです。

共同利用委員会
庄垣内正弘（京都大学・大学院文学研究科・教授）
栗本　英世（大阪大学大学院人間科学研究科・教授）
水島　　司（東京大学大学院人文社会系研究科・教授）
佐藤洋一郎（総合地球環境学研究所・教授）
斉藤　照子（東京外国語大学外国語学部・教授）
小長谷有紀（国立民族学博物館・教授）
家田　　修（北海道大学スラブ研究センター・教授）

研修専門委員会
橋本　　勝（大阪外国語大学外国語学部・教授）
藪司　　郎（大阪外国語大学外国語学部・教授）

海外学術総括班専門委員会
市川　光雄（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・教授）
伊藤　元己（東京大学大学院総合文化研究科・助教授）
岩坂　泰信（金沢大学自然計測応用研究センター・教授）
木村　秀雄（東京大学大学院総合文化研究科・教授）
栗本　英世（大阪大学大学院人間科学研究科・教授）
佐藤洋一郎（総合地球環境学研究所・教授）
諏訪　正明（北海道大学大学院農学研究科・教授）
徳留　信寛（名古屋市立大学医学部・教授）
長野　泰彦（人間文化研究機構・理事）
山村　理人（北海道大学スラブ研究センター・教授）
渡邉　興亞（総合研究大学院大学・監事）
河野　泰之（京都大学東南アジア研究所・助教授）

○編集委員会

本研究所の発行する学術誌『アジア・アフリカ言語文化研究』、モノグラフシリーズである『アジア・アフリカ言語文化研究叢書』などの審査に当たるため、学外の委員を加えた編集体制を設けています。2005～2006年度の編集委員会委員は次の通りです。

外部委員
上岡弘二（東京外国語大学・名誉教授）
梶　茂樹（京都大学・大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・教授）
鷹木恵子（桜美林大学・国際学部・教授）
土田哲夫（中央大学・経済学部・教授）
新免　康（中央大学・文学部・教授）
石川　登（京都大学・東南アジア研究所・助教授）
内部委員　深澤、中谷、栗原、呉人

外部資金受入状況

科学研究費補助金

（単位：千円）※間接経費を含む

区　分	平成14年度		平成15年度※		平成16年度※		平成17年度※	
	件数（件）	金額	件数（件）	金額	件数（件）	金額	件数（件）	金額
特別推進研究（COE） （COE形成基礎研究）	1	130,000	1	136,240	1	130,000	1	104,000
特定領域研究	9	41,900	4	40,800	4	45,700	3	32,400
基盤研究（A）	7	66,690	7	76,180	8	84,890	6	54,730
基盤研究（B）	2	4,100	4	12,100	6	22,600	6	22,600
基盤研究（C）	4	6,100	5	6,900	6	7,100	3	2,700
奨励研究（A）								
萌　芽　研　究			1	800	1	800	1	1,000
若手研究（B）	3	4,000	5	7,100	6	7,800	6	6,100
計	26	252,790	27	280,120	32	298,890	26	223,530

奨学寄附金

（単位：千円）

区　分	平成13年度		平成14年度		平成15年度		平成16年度	
	件数（件）	金額	件数（件）	金額	件数（件）	金額	件数（件）	金額
特定領域研究	2	6,800	2	10,400	1	200	1	2,040



◆ミャンマー・ヤンゴン市内
有名なシュエダゴン＝パゴダを見学中の小学生。男の子も女の子も、緑のロンジー（巻きスカート）をはいている。
（ミャンマー，2004年1月，荒川慎太郎撮影）

情報資源利用研究センター（IRC）

1. 設置目的

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所情報資源利用研究センター（Information Resources Center / ILCAA, 略称 irc-ILCAA）は、アジア・アフリカの言語文化に関する情報資源の蓄積・加工・公開と、それを活用した共同研究手法の開発、国際学術交流の推進を目的として、平成 9（1997）年度に設置されたものです。

2. 研究所とセンター

本研究所は、従来から、アジア・アフリカの諸言語のデータをコンピュータ化し、それぞれの言語の音韻論的・統語論的・語彙論的分析をおこなうとともに、歴史学的・民族学的・社会学的研究等、多目的な用途に供するデータベースの充実を図ってきました。このデータベースは、本研究所の最も重要な事業のひとつである、アジア・アフリカの諸言語の辞典・文典の編纂の基礎資料を提供し、かつ全国の研究者の共同利用に供されています。

3. 活動の指針

センターは、上記のようなこれまでの研究所の活動を基礎に、10 年間で、下記の点で、理論・技術の整備・洗練をおこなうことをめざしています。

(a) アジア・アフリカの言語文化に関するコンテンツ公開の場として

所内には、上記のような言語データだけでなく、アジア・アフリカの言語文化に関する多様な資料（パンフレット、ポスター、フィルム、8 ミリ、ビデオ、録音テープ等）が豊富に所蔵されています。このデータの所内・所外での利用は必ずしも容易ではなく、公開に向けた整備が緊要です。

(b) 国際的共同研究の場として

データベースを国際的に公開・共有し、それに基づく研究支援の環境をつくり、国際的共同研究の効率化と内容の充実を図ることをめざしています。

(c) コンテンツ蓄積・交換に関する基礎理論の整備母体として

通時的文字論を考慮した文字コード（符号化文字集合）論、多言語処理論、多表記系（スクリプト）の照合（collation）・整形・組版基礎理論等、従来、理論的な整備がほとんどない分野を理論化することは急務といえます。また、多表記系（スクリプト）混在での input methods、整形・組版結果の交換プロトコル等、まだ仕様自体が不安定な分野の仕様の洗練、さらには、画像・動画・音声抽象検索などのマルチメディア系での input methods とインタフェースにも、今後積極的に関与していく予定です。

4. 今年度の主な研究事業

毎年度、センター運営費によるデータベース構築、言語文化に関する一次資料の資源化のためのプロジェクトが企画・進行しています。その一例をあげると、「北米インディアン諸語音声」（代表：中山俊秀）のデジタル化、チベット語文献コーパスの構築（代表：星泉）などがあります。

この他に、以下のような本研究所で進行中の競争的研究費による研究活動、および外部団体との共同研究事業にも積極的に支援を行っています。

(1) 文部科学省·COE 形成基礎研究費『アジア書字コーパスに基づく文字情報学の創成』（代表：ペーリ・バースカララーオ）
(2) 文部科学省·データベース科研費『三省堂言語学大辞典』（代表：町田和彦）
(3) 産学連携共同研究『多言語機械翻訳システムの評価研究』（共同研究クラス A、代表：町田和彦）
(4) 新エネルギー·産業技術開発機構（NEDO）との共同研究『多言語処理技術の基盤整備』（代表：星

泉）
(5) 国際情報化協力センター（CICC）との共同研究『イスラーム関連サイト収集プロジェクト』（代表: 飯塚正人）

5. デジタル言語文化館

センターの研究活動の成果を世界に向けて発信するため、センターではインターネット上に「デジタル言語文化館」を開館しています。この「デジタル言語文化館」は、単なるコンテンツの羅列ではなく、その加工技術・呈示技術とその背景の理論化自体もコンテンツとなる点が特徴であり、蒐集展示と、蒐集資料・技術の工具利用の両方がおこなえるところが、従来のデジタルライブラリ（電子図書館）発想を包含しつつ、それを越える点です。

コンテンツには「ヒンディー語形態素解析・辞書」「言語調査票」「カイロの肖像・19 世紀」「ヒンディー語テキストコーパス」「チベット地図／人名・地名索引」など多数あります。今年度はコンテンツを充実させるためのプロジェクトを作り、活発に活動を進めていきますのでどうぞご期待ください。

6. 技術と研究の相互発展

センターは、望まれる技術の要求仕様を策定するのであって、技術自体を開発する場ではありません。望まれる技術とは、新しい技術の呈示によって技術への需要自体を呼びおこし、その結果、新たな研究工具を提供することで研究開拓のきっかけとなるような技術であり、すなわち、今は「技術的制約によって無理」と諦められ、研究分野自体が研究として認識されていないものを、明らかにするような技術を指します。

研究者の主体的発想による技術仕様の策定は、本センターのように、言語・歴史・民族・情報の各分野の専門研究者を擁し、技術と研究の相互刺戟を主眼として研究を進める専門機関によって、はじめて生れ得る成果と言えましょう。



◆台湾・台北市内
台北市内の朝の風景。孫娘らしい少女はマントウをちぎって鳩の餌にしている。（台北，2004 年 12 月，荒川慎太郎撮影）

フィールドサイエンス研究企画センター（FSC）

【目的】

フィールドサイエンス研究企画センター（略称 FSC）は、平成 16 年度の準備室段階を経て、所内措置により平成 17 年度に発足しました。AA 研の研究活動を特徴づけてきた臨地調査の手法をより実践的・理論的に開発して、さまざまな学問の領域を横断する「フィールドサイエンス」という「現地学」を構築するとともに、調査関連データを体系的に蓄積し、臨地調査に関わる研究者間の連携を担うことを目的としています。

【活動の指針】

FSC の当面の活動には、次の 6 本の柱から成ります。特に（1）～（4）については、これらを包括する研究事業「中東イスラーム研究教育プロジェクト」の事業本部を FSC に置き、その推進主体の役割を果たします。この事業は、現在のアジア・アフリカを俯瞰した際に中東・イスラーム圏に焦点を当てた研究が極めて重要であるとの認識に立って、平成 17 ～ 21 年度文部科学省特別教育研究経費をもって実施するものです。

（1）研究手法の開発

海外での臨地調査に関わる手法を実践的・理論的に開発することを、FSC の研究に関わる業務活動とします。中東地域を中心にイスラーム圏での臨地調査の研究がいかにあるべきか、を当面の重点課題とします。

（2）大型共同研究プロジェクトの実施

「ムスリムと非ムスリムの対立・共存」などをテーマとして、中東・イスラーム圏を中心にグローバルな視野をもつ大型共同研究プロジェクトを実施します。

（3）研修事業

上記の成果の社会還元の一部として、研究手法に関わる研修「中東・イスラーム研究セミナー」（7 月・12 月）と「中東・イスラーム教育セミナー」（7 月）を実施します。それぞれ博士論文執筆予定レベルの若手研究者、大学院生の研修生を公募し、地域や専攻分野の枠を超えた学際交流の場を提供します。

（4）現地研究拠点の設置

上記（1）～（3）の活動を効果的に遂行するため、複数の海外現地研究拠点を設置する準備を進めます。レバノンのベイルートをはじめ中東地域・イスラーム圏を重点的にカバーし、わが国におけるこの地域の研究の先端的拠点となることを目指します。

（5）海外学術調査総括班の実績の継承と展開

「海外学術調査総括班」は、1964 年以来、本研究所に事務局をおきつつ、他機関に所属する研究者と協力して組織され、科学研究費補助金（海外学術調査）にかかわる研究者・研究組織間、および研究者側と日本学術振興会の間の情報交換、連絡調整などの活動を行ってきました。活動の主なものとしては、海外学術調査の研究組織の代表者を集めて情報交換を行う「海外学術調査総括班フォーラム」の開催、国際情勢に即応した研究を可能にするための現地調査、これまでの海外学術調査に関する蓄積データのウェッブページにおける限定公開とその利用の開発、および広報などです。今後、FSC が中心となり「総括班」の実績を継承し、さらに展開していくことになります。URL は、http://www.aa.tufs.ac.jp/~gisr/index-j.html

（6）地域研究コンソーシアムとの連携

「地域研究コンソーシアム」は、教育研究組織のみならず NGO も含めた幅広いアカデミック・コミュニティに立脚して、地域研究関連情報を蓄積し、その成果を広く社会に問うことなどを目的としています。AA 研は、北海道大学スラブ研究センター、京都大学東南アジア研究所、国立民族学博物館地域研究企画交流センターとともにワーキンググループを形成して、コンソーシアムの設立準備に当ってきました。コンソーシアムは 2004 年 4 月 26 日に発足しました。全国共同利用研究所である AA 研は、こうした協議体のなかで幹事組織の一つとして大きな役割を果たしていきますが、FSC はその連携活動の窓口として機能します。

共同研究プロジェクト

全国共同利用研究所である本研究所にとって、所員が中心となって所外の研究者と共同で推進する共同研究プロジェクトは、最も大切な研究業務のひとつです。

これまで数多くのプロジェクトが組織され、約400点におよぶ出版物をはじめとして多様な研究成果をあげています。

また、1996年度からは、従来の研究分野を越えた斬新な共同研究を推進するプロジェクトに重点的に予算を配分し、重点プロジェクトと位置づけて運営することになりました。最初の重点プロジェクトとして「東南アジアにおける人の移動と文化の創造」が組織され、国際シンポジウムをおこなうなど、活発な研究活動が展開されてきました。1997年度には、さらに「音韻に関する通言語的研究」プロジェクトが、また2000年度からは「アジア･アフリカにおける政治文化の動態」が組織されました。

さらに2000年度からは、研究所の共同利用性を高めるために、専門知識を有する所外の研究者に代表をお願いして運営するプロジェクトを開始しました。これまでに、「浅井・小川未整理資料の分類・整理・研究」などが実施され、2005年度は「音韻の通言語的研究」が所外の研究者を代表として実施されます。

本年度おこなわれるプロジェクトは次のとおりです。



◆南インド・カルナータカの民謡歌手
（インド・カルナータカ州チッカイルール村にて、2003年12月、太田信宏撮影）

重点共同研究プロジェクト

言語の構造的多様性と言語理論　（主査：中山俊秀／所員7、共同研究員14）

人間言語は実に多様な構造的特徴を見せるが、一方で、すべての言語は同じ生物学的・認知的基盤の上に形成されたシステムである。人間言語の本質を捉えるためには、その構造的多様性とその根底にある普遍性の両面をふまえる必要があることは異論のないところである。しかし、前者と後者のどちらに力点を置くかについては言語研究者の中で大きく意見が分かれる。

現在の言語研究で有力な形式理論的研究では言語を人類共通の認知能力の問題として捉え、言語知識の普遍的モデリングを目的とする。その枠組みの中では言語の構造的多様性は表層の派生的現象にすぎず、言語システムの本質的理解には副次的な意味しか持ち得ないとする。しかし、人間言語がすべて同じ生物学的・認知的基盤の上に成り立っているという発達上の単一性は、そのまま人間言語能力の発現形としての個別言語の構造的画一性を保証するものではない。言語の構造的多様性の幅が普遍的なモデルでのとりまとめを許すか否かは、未だ経験的な立証を待つ問題である。

言語の一次データに基づいて個々の言語のシステム性を捉えようとする記述的研究では、西欧言語学の伝統の中で「言語分析の基礎」として確立された枠組みやカテゴリーが有効に適用できないケースが多く報告されてきた。その中で、特に、非印欧語型の言語の記述に携わる言語学者、また、多様な構造をもった数多くの言語での事実を踏まえた通言語的、類型論的なアプローチをとる言語学者の間で、異なった言語タイプ間の構造的差異の深さが強く認識され、従来の欧米大言語ベースの普遍的言語理論の展開を反省し、その根本的枠組みを問い直す必要があるという機運が高まってきている。

そこで本プロジェクトでは、言語の構造の様々な面での多様性にかんして言語研究者コミュニティー内での認識を高め、その中で、構造的多様性を人間言語の基本的性質の一部としてふまえた言語記述・理論研究のあり方及び一般言語研究の目指すべき方向を明らかにすることを目的として共同研究活動を展開していく。

阿部　優子　　江畑　冬生　　蝦名　大助　　加藤　昌彦　　加藤　重広　　佐久間淳一
笹原　　健　　笹間　史子　　沈　　力　　月田　尚美　　藤原加奈江　　町田　　健
籾山　洋介　　吉田　一彦



◆ナミビア東北端の町カティマ・ムリロの市場で
川向こうのザンビアとの間での人々の往来も盛んである。（2002年9月、永原陽子撮影）

一般共同研究プロジェクト

東アジアの社会変容と国際環境　（主査：中見立夫／所員3、共同研究員32）

近年における国際情勢の変化と学術交流の発展によって、われわれ歴史学研究者は東アジア各地域の文書館・図書館などに所蔵される一次資料に対し、以前とは比べられないほど容易に接近できるようになった。さらに、現地学界でも、あらたな歴史評価・研究動向がおこり、われわれの研究への刺激となっている。ただ対象とすべき史料の量があまりに膨大で、その実態を体系的に把握してはいない。

また、個別の研究が深化するとともに、より大きな視野のもとに、問題をとらえなおし、分析枠組みを再検討することも必要である。さらに海外学界との共同研究、史料調査も、双方にとって、より具体的で実りの多い形で推進しなければならない。

本プロジェクトでは、このような研究状況を念頭におきながら、18世紀から20世紀初頭の東アジア世界各地域における社会の変容が､外部世界とどのように有機的に連関していたかという問題を中心にすえ、文書史料によりそれがどこまであきらかにできるか検討する。東アジアに関する史料と研究情報の開かれたフォーラムをめざしている。

毎回テーマをかえながら、海外からのゲスト・スピーカーもまじえ、シンポジウム形式で研究会を開催し、また『東アジア史資料叢刊』などの出版物も刊行している。本年度は、モンゴル史料、および日本所在朝鮮王朝時代古文書に関するシンポジウムをおこなう予定。

赤嶺　守	石井　明	石川　禎浩	井上　治	井村　哲郎	江夏　由樹
岡　洋樹	尾形　洋一	岡本　隆司	笠原十九司	加藤　直人	川島　真
貴志　俊彦	岸本　美緒	楠木　賢道	佐々木　揚	新免　康	菅原　純
寺山　恭輔	西村　成雄	萩原　守	浜下　武志	原　暉之	平野　聡
ブレンサイン	細谷　良夫	松川　節	松重　充浩	毛里　和子	森川　哲雄
柳澤　明	吉澤誠一郎				

西南中国非漢族の歴史に関する総合的研究　（主査：クリスチャン・ダニエルス／所員4、共同研究員18）

現在の西南中国は、もともと非漢族の居住地域であり、中国歴代王朝の支配下に少しずつ組み込まれていく歴史をもつ地域である。元明清を通じて、漢民族移民の増大と歴代王朝の統治政策によって、多くの非漢族が中央政府に直接支配されるようになり、そのことによって民族移動が激しくなり、非漢族の土着社会に大きな変容がおこり、東南アジア大陸部へ移住する非漢族も出現した。だが、従来この歴史過程を総合的に分析する研究は僅少であった。

本プロジェクトの目的は、(1) 西南中国非漢族の歴史に関する研究発表、(2) 史（資）料の発掘・収集・整理をおこなうことによって、従来注目されることのなかったこの地域の歴史に対する研究を促進することにある。なお、方法論として非漢族を主体とした分析視点を重視すると同時に、歴史学者以外に文化人類学、民族学、民俗学、言語学などの専門家の参加によって学際的なアプローチの構築をめざす。

井上　徹	上田　信	上西　泰之	菊池　秀明	岸本　美緒	小柳　美樹
末成　道男	武内　房司	多田　狷介	谷口　房男	張　士陽	塚田　誠之
寺田　浩明	林　謙一郎	吉澤誠一郎	吉野　晃	渡辺　佳成	渡部　武

インド洋海域世界の発展的研究　（主査：深澤秀夫／所員 2、共同研究員 17）

本プロジェクトにおいては、個別文化・社会研究の成果を、8 世紀頃に成立した＜インド洋海域世界＞の歴史的展開過程についての通時的研究に導きいれること、またその通時的視点を共時的な個別文化・社会研究に再還流することの可能性を検討する。＜インド洋海域世界＞についてのこのような双方的視点による考察は、局所的には地域研究に寄与するのみならず、グローバル化する現代世界の中における多元・多文化的な人の在り方に対し、具体的な共存モデルの提示をも招来するものである。

秋道　智彌　　飯田　　卓　　飯田　優美　　川床　睦夫　　菊澤　律子　　崎山　　理
杉本　星子　　高桑　史子　　田中　耕司　　富永智津子　　花渕　馨也　　堀内　志保
堀内　　孝　　松浦　　章　　森山　　工　　門田　　修　　家島　彦一

日本占領期ビルマ（1942-45）に関する総合的歴史研究
（主査：根本敬 / 所員 2、共同研究員 8）

日本占領期のビルマに関する総合的な歴史研究を追究するプロジェクトとして 2001 年度に発足し、2002 年度よりトヨタ財団の計画助成（1 ～ 3 年目合計 1324 万円）を受けながら、国内での研究会と聞き取り調査のほか、日本・ビルマ・英国・米国での資料調査を実施している。主として同時期の政治・思想・行政・軍事・農業（経済）・社会・地方史・少数民族・女性といった諸観点から各人がテーマに沿って調査をおこない、昨年度は最終成果報告を兼ねた国際シンポジウム（英語）を海外からの研究協力者も招いて AA 研で開催し、2 日間を通じて延べ 133 名の参加者を得た（2004 年 10 月 9 日、10 日）。最終年度の今年は、聞き取り調査の継続と、成果刊行物の出版準備をすすめる。年度末（2006 年 3 月）までに英文・和文の論文集をそれぞれ出版し、あわせて聞き取り調査の暫定報告書、および文献解題を含めた関連資料館案内を刊行する予定である。

池田　一人　　伊野　憲治　　岩城　高広　　内山　史子　　高橋　昭雄　　武島　良成
南田みどり　　森川万智子

修辞学の情報学的再考　（主査：小田淳一／所員 6、共同研究員 18）

古典修辞学の諸部門の中で 19 世紀まで存続したのは「表現法（elocutio）」のみであるが、20 世紀半ばから始まった修辞学の復権は表現法を、テクストを構成する諸要素間の範列的関係及び連辞的関係におけるコード変換の技法として、実体的な要素単位に対して直接作用する操作であると見なすに至っている。

本プロジェクトは言語表現、音楽表現、映像表現等の作り手、またそれらの表現を様々な手法を用いて分析している研究者を共同研究員に加え、芸術の美的価値をある構造の関数として記述するという、一元的な芸術＝形式論に基づく「形式的構造の研究」としての一般修辞学を情報学的に考察することによって、様々な形式を持つ言語文化情報に偏在する修辞学的技法のレパートリーを明らかにすることを目的とする。

青柳　悦子　　石井　　満　　宇佐美隆憲　　内海　　彰　　小方　　孝　　金井　明人
上村龍太郎　　佐藤みどり　　徃住　彰文　　永崎　研宣　　永野　光浩　　難波　雅紀
西尾　哲夫　　平井　　覚　　堀内　正樹　　松本みどり　　水野　信男　　良峯　徳和

Studies on African Languages （主査：加賀谷良平／所員2、共同研究員21）

本プロジェクトは、アフリカ大陸を、サハラ以北・以南、東アフリカ・西アフリカ等のように分断することなくとらえ、種々の語族、国家、民族とかかわるアフリカの諸言語を、広い視野から分析・考察していくことを目的としている。

現地調査に基づく、地道ながらもオリジナルな研究を主流としつつ、文献・資料に基づく緻密な考察をも加え、さまざまな歴史・文化の交錯するアフリカの言語の実情を、多彩な研究者の間で共有し、明らかにしていきたい。

具体的な活動計画：

1）年間3乃至4回の研究会を開き、2～3名による口頭発表およびそれに基づく討論を行なう。
2）研究会では、自由発表のほか、その回のテーマを設定し、共同研究員や研究協力者に、個別の言語のデータを提示してもらい、それらをもとにディスカッションを行なうという形式も考えている。
3）研究会の成果は、発表者による、AA研Journal等への投稿を要請する等、紙媒体での公表はもちろんのこと、本プロジェクトのウェブサイトを整備し、すみやかにウェブ上で公開していく。
4）本プロジェクトのウェブサイトでは、研究会で口頭発表されたものでなくとも、アフリカの言語研究に関する論文や書評等を積極的に受理・公開する。
5）その他、共同研究員等から寄せられた、アフリカ言語学やそれに関連する学会等の情報を、ウェブサイトにおいて告知していく。
6）ウェブサイトと並行して、メーリング･リストによる迅速な情報交換を行なう。
7）ときには、在日アフリカ人等を交えた懇親の場を設け、広い意味での異文化交流も図っていきたいと考えている。

安部　麻矢	阿部　優子	神谷　俊郎	小森　淳子	榮谷　温子	佐藤　道雄
塩田　勝彦	砂野　幸稔	竹村　景子	柘植　洋一	中野　暁雄	中村　博一
日野　舜也	Philips, John. Edward		宮本　律子	Ratcliffe, Robert R.	
若狭　基道	梶　茂樹	松下　周二	高村美也子	宮崎久美子	

社会文化動態の比較研究―北部南アジアの動きから （主査：石井　溥／所員1、共同研究員23）

人類学において比較研究は不可欠であるが、それを方法として確立することは大変に難しい。これは静態の比較についてすでに言われているが、動態の比較はさらに大きな問題である。しかし揺れ動く世界の中にある社会文化を把握しようとする場合、動態の比較は、分析の視点として大いに重要である。

ここでは、北部南アジア［インド（南部4州以外）、パキスタン、バングラデシュ、ネパール、ブータン］を主な対象地域とし、その諸側面の変化を捉え、相互の比較を行いつつ分析を深める。北部南アジアは英植民地権力の影響が直接的であった地域と間接的であった地域を含み、宗教的にも多様で、また、近年、経済自由化、「民主化」、あるいは独特の国民形成などの多様な国家レベルの変化を経験している。

本共同研究では、このような地域における社会文化変化の分析とその比較をとおして、人類学研究における比較方法の洗練を目指す。

今井　史子	上杉　妙子	鹿野　勝彦	小牧　幸代	佐藤　斉華	橘　　健一
田辺　明生	外川　昌彦	中谷　純江	中谷　哲弥	名和　克郎	幅崎麻紀子
Maharjan, Keshav Lall		三尾　　稔	南　真木人	宮本　万里	森本　　泉
八木　祐子	安野　早己	山上　亜紀	山本　真弓	山本　勇次	渡辺　和之

無文字社会における「むかし」を知るには？―無文字社会の過去を知るための研究とその手法開発―　（主査：加賀谷良平／所員3、共同研究員25）

アフリカやオセアニア等の無文字社会には自らの手による文字ではなく、外部の人間の手による極めて限られた文字資料しかない。このような資料は外部社会のバイアスが高く、また限られた視点からのものであり、無文字社会の人々が自ら自他を考察したものではない。本プロジェクトは無文字社会の人々が自らをどのように考察し、自らの社会、文化をどのように伝達してきたかを研究することによって、これらの社会を自らの視点から再構成することを目的とするプロジェクトである。その第一歩として、様々な研究分野でのむかしを知るための研究を通して、その方法論を研究、議論する。また、各研究分野の連携による「むかし」を知るための研究を模索する。

飯田　卓　池谷　和信　井関　和代　上田冨士子　遠藤　保子　神谷　俊郎
亀井　哲也　菊澤　律子　慶田　勝彦　佐々木重洋　佐藤　俊　高村美也子
竹沢尚一郎　鳥山　寛　中野　暁雄　西田　正規　日野　舜也　藤井　麻湖
堀　信行　三木　亘　森口　恒一　吉田　憲司　吉田　忍　米田　信子
和田　正平

イスラーム写本・文書資料の総合的研究　（主査：羽田亨一／所員4、共同研究員22）

イスラーム世界で著され、記された歴史的文化的遺産である写本・文書資料の総合的研究を目的としている。アラビア語、ペルシア語、オスマン・チャガタイ両トルコ語の写本・文書が主な対象となる。

写本、文書の利用は今日の学界ではあたりまえのこととなっているが、写本・文書資料利用のための方法論については十分な議論が尽くされないまま、進んでいるのが現状である。そこで、現在、日本の各地で行われている写本研究・文書研究をネットワーク化し、写本学、古文書学を踏まえた研究会を積み重ね、相互の知見を交換する。

また、少人数からなる作業グループを編成し、写本・文書資料の校訂、翻訳を推進する。成果は可能な限り、研究所の出版物として刊行する。

赤坂　恒明　秋葉　純　磯貝　健一　江川ひかり　大河原知樹　大稔　哲也
小野　浩　川本　正知　久保　一之　後藤　敦子　清水　和裕　高松　洋一
中町　信孝　林　佳世子　前田　弘毅　真下　裕之　間野　英二　守川　知子
森本　一夫　家島　彦一　矢島　洋一　山口　昭彦



◆草原の中を進む牛車
悪路では、牛車の方が頼りになることもある。
（ミャンマー，パガン，塩原朝子撮影）

中国系移民の土着化／クレオール化／華人化についての人類学的研究

（主査：三尾裕子／所員 2、共同研究員 19）

本研究では、海外中国人（本研究では、地政学的な「中国」の外に移住した中国系の人々を指す用語として用いる）を対象に、海外中国人を同質的、単一的に表象する従来の人文・社会科学の諸研究に共通した分析視点を批判的に再検討し、新たな海外中国人像（華人／チャイニーズ・クレオール等）や「民族」概念を再構築することを目的とする。具体的には、以下の諸点を明らかにする。

(1) 従来の諸研究において等閑視されてきた、周縁的存在となり土着化が進んだ中国系住民および多民族文化との混淆としてのチャイニーズ・クレオール等を中心とする多様な海外中国人に注目し、それらの人々が構成する様々な社会文化の実態、そしてそれらの人々のアイデンティティ形成過程を分析する。

(2) ホスト社会と中国系住民との相互作用、国民国家化の過程、ローカル／グローバルの関係性から生じる、中国系住民が関わる民族カテゴリーとそのエスニック・ポリティックスの実態を把握する。歴史過程の中で中国系住民の土着化、クレオール化、或いは「中国人化（華人化）」という異なるベクトルが、必ずしも時系列的にではなく、時に同時並行的に進んで来たことや、土着化やクレオール化の道を歩んだ海外中国人のある一部分は、特定の政治的、経済的な要因によって中国人の範疇から捨象されたことを明らかにする。

(3) 土着化あるいはクレオール化した海外中国人という周縁性の排除によって、本質主義的な「華僑」「華人」像が想像されるプロセスを明らかにする。これまで 2 年間では、主に中国系住民を調査対象としてきたメンバーが、中国系移民の視点からホスト社会との関係、その中で構築される自画像についての分析をおこなった。来年度は、徐々に軸足をホスト社会の方に移し、ホスト社会から見た中国系住民の社会、中国系住民との接触、交渉過程、あるいは社会文化の融合、断絶などの様相などについての報告を行う予定。なお、本プロジェクトは、昨年度より開始された科研費基盤 A「東南アジアにおける中国系住民の土着化・クレオール化についての人類学的研究」と連携し、現地調査を踏まえた研究を行っている。

赤嶺　淳　　板垣　明美　　市川　哲　　甲斐　勝二　　紀　宝坤　　桑山　敬己
貞好　康志　　末成　道男　　菅谷　成子　　芹澤　知広　　田村　和彦　　田村　克己
中西　裕二　　信田　敏宏　　舛谷　鋭　　宮下　克也　　宮原　暁　　山本　須美子
王　維

日本語組版研究

（主査：芝野耕司／所員 1、共同研究員 8）

1980 年代にワープロが普及するにつれて、当時のワープロが実現していた基本的な禁則処理を含むいわば原稿用紙レベルでの組版が普及の兆しを見せ、活版印刷時代の高度な日本語組版は危機に瀕していた。

この問題に対応するため、JIS X 4051 日本語文書の行組版方法を 1993 年に制定し、1995 年及び 2004 年に改正した。また、2000 年には JIS X 4052 日本語文書の組版指定交換形式を制定した。

欧米での組版は、シカゴ大学の Chicago Manual of Style やオックスフォード大学の Style Manual など、組版とともに、正書法も含めたスタイルマニュアルが確立しているが、日本語に関しては、このようなものは存在しない。

こうしたことから、組版規則だけでなく、正書法も含めた日本語スタイルマニュアルを検討することが必要である。

居郷　英司　　枝本順三郎　　小野沢賢三　　小林　敏　　逆井　克己　　田原　恭二
野村　保惠　　平松　慎司

「植民地責任」論からみる脱植民地化の比較歴史学的研究

（主査：永原陽子／所員 1、共同研究員 22）

本プロジェクトは、ヨーロッパ諸国とアフリカを中心とする旧植民地との歴史的関係において、植民地支配および奴隷貿易のもたらした損害に対する補償や謝罪の問題が双方の当事者の間でどのように論じられ扱われてきたかを検討することをつうじ、脱植民地化過程の段階・特質を明らかにすることを目的としている。そのさい、日本＝アジア関係などを念頭においた比較史的観点を重視しながら、戦争責任論の中から生まれた「人道に対する罪」概念を援用し、「植民地責任」概念を提起しようとしている。アフリカにおける植民地支配はその前史としての奴隷貿易の歴史と不可分であるため、「植民地責任」概念は、必然的に、奴隷貿易の歴史にもかかわって敷衍されることになる。最終的には、この概念を用いて近代世界史の構造の中での脱植民地化過程とそれをめぐる歴史認識をアジア・アフリカの側から照射することを目指している。

本プロジェクトは、研究所のすすめる三つの研究内容のうち、「地域生成に関する研究」にかかわるものであるが、「地域」を一つの限定された領域としてではなく、関係性の概念としてとらえようとしている。近年の旧植民地地域からの「補償要求」などの運動は、当該地域の人々の植民地支配の歴史についての認識を示すものであり、それは旧植民地領有国における歴史認識との相互関係の中で形成されている。本プロジェクトは、アフリカ旧植民地を中心に据えつつ、日本＝アジア関係を重要な参照枠とすること、また奴隷貿易をも射程に入れた長期の歴史的視点をもつことで、従来の地域研究でともすれば後景に退きがちだった世界史の構造の問題に意識的にかかわり、また現代世界の中で具体的な解決を求められているテーマについて、歴史学的な立場から認識を深めようとするものである。

そのような意図から、本プロジェクトではアフリカ史研究者、ヨーロッパ帝国史研究者、ラテン・アメリカ史研究者、日本・アジア史研究者を糾合した「地域研究」の新しいスタイルを試みている。また、若手研究者、とくに PD 層から大学院生を含む研究者を目指す人々を中心に組織し、プロジェクトをつうじて若手研究者を育成しつつ新しい共同研究の成果を挙げることを目指している。

本プロジェクトは科研費プロジェクトを兼ねており、年 3.4 回の研究会のほか、共同研究員の現地調査も並行して進めている。最新の現地調査の結果を持ち寄って研究内容を豊かにすることは、本プロジェクトの重要な内容である。最終的には、成果を商業出版で公表することを目指している。

浅田　進史	飯島　みどり	大峰　真理	小山田　紀子	尾立　要子	柴田　暖子
清水　正義	杉山　優子	鈴木　茂	高林　敏之	旦　祐介	中野　聡
浜　忠雄	平野　千果子	舩田クラーセンさやか		前川　一郎	溝辺　泰雄
吉國　恒雄	吉澤　文寿	吉田　信	渡辺　和仁	渡辺　司	



バガンの町から 2 キロほど原野に入っていくと谷間の中に僧院が一つ隠れるように存在している。谷の上まで登ってきて辺りを見渡している僧が一人いた。（ミャンマー・バガン，2005 年 1 月，高島淳撮影）

ドイモイの歴史的考察　（主査：栗原浩英／所員2、共同研究員6）

ドイモイ（刷新）政策がベトナム共産党の公式な政策として提起されてから、すでに18年が経過しようとしている。この間に、ドイモイはベトナムの党・国家の諸政策（政治・経済・軍事・外交・文化等）、社会、国民の価値観のあり方に大きな変化をもたらした。しかし、この間にドイモイを対象とした研究にさほど進展があったとはいえない。とりわけ、ドイモイ研究の展開に際して不可避であると思われる次の2点に関して、議論が深化されないままの状態を続けておくことは許されないであろう。それは、第一に、ドイモイの起源に関わるテーマであり、その中には、①ドイモイの開始に際しての南ベトナムの役割、②レ・ズアン時代末期（1979年～85年）の一連の改革政策（通貨改革、農業における生産物請負制など）とドイモイの関連性をどのように評価するかという問題が含まれる。第二には、一党独裁下における市場経済導入、経済発展優先志向などの点で、ドイモイと共通すると思われる改革政策が他国にも存在する（した）事実に着目して、ドイモイを一国の枠組から脱却して考察する必要性がある。

本プロジェクトは、以上のような問題認識に立って、大きく二つのアプローチに依拠しながら、ドイモイ研究の新境地開拓をめざす。第一には、ドイモイにおけるベトナム固有の要因を探究するために歴史的なアプローチを援用していく。第二には、体制比較を通じて、ドイモイのもつ普遍的な側面を解明することである。具体的なテーマとしては、第一点に関わるものとして、①ドイモイの起源に関わる諸問題（南ベトナムの存在とドイモイ、レ・ズアン時代末期の改革政策の位置付け、北部におけるドイモイに先行する諸現象、ソ連におけるペレストロイカの影響）、②集団主義体制との対比でみたドイモイ、あるいはドイモイに残存する社会主義的性格、第二点に関するものとして、中国の改革・開放政策、ラオスの新思考政策、移行経済諸国（旧ソ連、東欧など）、インドネシアの開発独裁体制との比較検討を進めている。

石井　明　　加藤　弘之　　白石　昌也　　鈴木　基義　　竹内　郁雄　　古田　元夫

東地中海地域における人間移動と「人間の安全保障」　（主査：黒木英充／所員4、共同研究員21）

東地中海地域は、商業・巡礼・移民など、古代より活発な人間移動と諸集団の交流の場を提供してきた。人類史上、グローバリゼーションのプロトタイプを最初に経験した地域といえよう。日常的異文化接触のなかで他者を受容し安全を保障するシステムについては、確固たる伝統の存在が認められる。

一方、現在の東地中海地域にはパレスチナ問題やキプロス紛争をはじめ、人間移動を伴う深刻な民族・宗派問題が多数存在する。これらの問題は、ゲーム論的な国際政治の枠組のなかで分析されることが多く、現地の文化的・社会的文脈のなかに位置付ける作業は軽視されてきた。

本研究プロジェクトは、人間の空間的移動と社会移動を総合した「人間移動（Human Mobility）」を鍵概念として援用し、民族的・宗派的に多様な構成をもつ東地中海地域の諸社会が、現在深刻な内部対立を孕む危機的状況に至った過程を検証するとともに、安全保障の規範や共存の論理を、人間移動の過程とそれを取り巻く環境のなかに発見し、「人間の安全保障」の議論に新たな視角を提供することを目指す。

なお、本研究プロジェクトは、科研費による「新たな東地中海地域像の構築」プロジェクトと連動して進めれている。

臼杵　陽　　小副川　琢　　粕谷　元　　北澤　義之　　栗田　禎子　　佐藤　幸男
佐原　徹哉　　澤江　史子　　末近　浩太　　土佐　弘之　　長沢　栄治　　中村　妙子
間　寧　　堀井　優　　前田　弘毅　　松井　真子　　村田奈々子　　森　晋太郎
家島　彦一　　屋山久美子　　吉村　貴之

地球文明時代の世界理解と新しい倫理・人間観の研究

（主査：中谷英明／所員 10、共同研究員 45）

現代世界は、一方では物心両面における比較的豊かな生活を保証すると同時に、他方では紛争・貧困・地球環境・疫病などきわめて大規模かつ深刻な問題を惹起している。

これらの問題は互いに連関しているから、個別的対症療法は効果が限定的であり、新たな問題を引き起こしかねない。その解決には、先ず地球文明がいかにあるべきかという明確な未来像が根底になければならない。そしてそのためには、相互影響し合いつつ刻々に変化する複雑なこの世界を、自然・世界（共同体）・人間の３層において正確に理解することが必要である。

往時には一人の哲学者が担ったこの現状俯瞰と新しい世界構想の営為は、科学の加速度的進展と諸地域の急激な変化を伴う今日の世界においては、一人の研究者が遂行することが殆ど不可能となっている。それは人文・社会・自然の研究者の共同研究として、はじめて可能であろう。このような人文科学の新領域を「総合人間学」と呼びたい。

本研究は、以上の認識のもとに、「総合人間学」―自然と社会（地域）に関する最先端の知を集約し、それら諸現象の人間的価値を諸文明の精神伝統に照合して再検討しつつ、新しい世界観・人間観・倫理観の確立を目指す「共同研究の場」 ― の創出を模索するものである。

平成 17 年度研究計画

(1) 第２回総合人間学シンポジウム「人間を知り、未来社会を構想する」

平成 17 年 10 月。外国からの招聘者４名・日本人講演者１名

(2) 研究会：２回（平成 17 年初夏、平成 17 年 10 月・ワークショップ終了後）

なお、フランスの Maison des Sciences de l’Homme、アメリカの Harvard Round Table（Harvard 大学）との共同研究を実施する。

朝倉　尚	池内　了	池田　知久	池本　幸生	市川　裕	石堂　常世
逸身喜一郎	内山　勝利	大津　透	丘山　新	小川　正廣	柿木　隆介
笠井　清登	桂　紹隆	加藤　進昌	河井　徳治	黒田　彰	行場　次朗
小島　毅	後藤　敏文	塩月　亮子	新宮　一成	杉下　守弘	杉本　良男
関根　清三	立木　康介	恒川　恵市	手島　勲矢	長野　泰彦	西川　昌弘
納富　信留	信原　幸弘	林　信夫	林　もも子	原　洋之介	日高　敏隆
廣瀬　通孝	広田　光一	寶珠山　稔	松尾　剛次	丸山　徹	三木　雅博
村上　征勝	守屋　彰夫	矢野　環			



かつては河であったと思われるとても細長い沼の渡し船。一番近い町からでも悪路を車で２時間の果ての村への入り口だ。
（ミャンマー・バゴー管区，2005 年１月，高島淳撮影）

マレー世界における地方文化　（主査：宮崎恒二／所員4、共同研究員20）

国家としてのインドネシア、マレーシアを包含する広義の「マレー世界」の多様な地方文化に関する人類学的な研究はこれまでも行われてきた。しかし、多くの地方に残る現地語文書に関しては、人類学、歴史学いずれの分野からも着目されていない。これらの文書の中には、各地方の文化の形成や変遷に関する興味深い資料が含まれており、あらたな資料の宝庫である。本計画は、これらの文書を中心に、地方文化の形成過程に関する研究を行うものである。本計画は以下の事業と組み合わせて行う。

1）インドネシア文献学に関する研修を行い、専門研究者の育成、再訓練を行う。
2）インドネシアとの共同研究事業の一部として実施する。
3）短期共同研究と組み合わせ、参加する若手研究者を公募する。

2005～2006年度は、外国人客員を中心にインドネシア文献学に関するセミナーを定期的に開催するとともに、ジャウィ文書ならびにジャワ文書の研究に焦点を当てる。

青山　亨　新井　和広　奥島　美夏　Omar Farouk Bajunid　川島　緑
久志本裕子　国谷　徹　黒田　景子　小林　寧子　塩谷　もも　菅原　由美
東長　靖　中田　考　西　芳美　西尾　寛治　服部　美奈　見市　健
水上　浩　山口　裕子　山本　博之

朝鮮語史研究　（主査：伊藤智ゆき／所員2、共同研究員9）

朝鮮語は朝鮮半島で話されている言語であり、日本語同様、その起源や系統関係が不明な言語である。また朝鮮語は15世紀半ばにハングルが創製されるまで固有の文字をもっていなかったため、朝鮮語史の研究はより困難なものになっている。

それに加え、従来の朝鮮語の研究はそれぞれの研究者が特定の時代の朝鮮語について研究することが主で、朝鮮語史を研究する者同士が相互に協力することによって朝鮮語史全体の流れを追求するということはなかった。

そもそも朝鮮語史の研究は、日本でも歴史の古い研究分野であり、研究者も大勢いるにも拘わらず、朝鮮語史をテーマにした研究会や学会も存在していない。朝鮮語史研究が発展しつつある今、研究者が各々の研究を通じて交流することは必要不可欠と見られる。

そこで本プロジェクトでは、古代～近代に至る朝鮮語の研究者が集まり、各時代の朝鮮語について、音韻・文法・書誌学等さまざまな側面からの分析を試みる。

具体的には年2回の研究会を企画する（1回に1～2名程度の研究発表を予定）。この研究会は、古代朝鮮語の内的再構、口訣資料や訓点資料の分析、諸文献の刊行経緯や制作方法等に関する書誌学的研究、中期朝鮮語・近代朝鮮語における音韻・文法・語法・方言に関する諸問題の研究、朝鮮漢字音研究等を発表のテーマとする。またこの研究会には、専門の研究者だけでなく、朝鮮語史研究を志す大学院生も多く参加するよう要請し、多角的な討論の場を目指す。

伊藤　英人　門脇　誠一　岸田　文隆　趙　義成　陳　南澤　辻　星児
南　潤珍　福井　玲　藤本　幸夫

人類社会の進化史的基盤研究（1）　（主査：河合香吏／所員 4、共同研究員 12）

本研究プロジェクトは、人類社会を霊長類から現生人類に至る進化の軸上で比較考察し、人類学における社会理論の新たな展開をめざそうとするものである。それによって人類の「文化」が社会形成にいかに関与しているかを再考する。

社会理論のなかで第一に問題となる「集団」に焦点を当てる。「集団」の概念を霊長類進化史上におくことにより、この概念の自明性を崩し、個体レヴェルの自他認識を越え「他集団」なる抽象的な他者の生成に到る「集団」の成りたちをふくめ、「集団」の認識（perception）の生成と展開を進化史的な視点から検討する。これにより、他者認知やアイデンティティといった個体間関係、およびテリトリーの生成とその認知、規則の発生と定着の過程といった個体間関係を超えた社会事象に至る問題群に迫る。

社会事象にあって、「集団」は比較的顕在化（目に見えやすい）したものである。したがって「人類社会の進化史的基盤研究」というときに、広く霊長類学的知見を含めて、人類史的規模での比較の橋頭堡が築きやすい。長期的なプロジェクト研究としては、継続的に「所有」、「制度」などを扱ってゆく予定であるが、その第一歩として、今回のプロジェクトを位置づけている。

共同研究員として、霊長類学の分野からは霊長類社会学および霊長類生態学の専門家、人類学の分野からは生態人類学、文化・社会人類学、人類生態学の専門家を加えている。これに社会思想史の専門家に参加してもらうことにより、霊長類から人類への架橋の理論的意義を考察する示唆を得たいと考えている。

また副次的な効果として、近年、社会生物学、行動生態学への理論的特化という傾向を強めつつある霊長類学研究を、人類との関係に再び位置づけることにより、日本における霊長類学および生態人類学の創成契機であった人間存在の根源的かつ多元的理解という学的動機を回復しうることが期待される。

伊藤　詞子　　今村　仁司　　梅崎　昌裕　　大村　敬一　　北村　光二　　衣笠　聡史
黒田　末寿　　杉山　祐子　　寺嶋　秀明　　中川　尚史　　早木　仁成　　船曳　建夫

形態・統語分析における ambiguity（曖昧性）―通言語的アプローチ―　（主査：呉人徳司／所員 7、共同研究員 25）

言語の記述にあたっては、対象言語にみられる文法現象が例外なく記述された文法規則にあてはまるのが理想的な状況であるといえよう。ところが現実には、定義のはざまにおちこむさまざまな現象がみられる。たとえば、形態・統語論面において二通り（またはそれ以上）の分析が可能であることは珍しくない（例：モンゴル語の特定の構文の使役分析と受動分析、フィリピン諸語の統語構造のフォーカス分析と能格分析）。一方、通言語的にみると、同じ用語で記述されたものでも実質が異な（ってみえ）るものもある（例：タイ語における「語」とアメリカ原住民語における「語」）。

それぞれの現象は文法記述（文法理論）における定義の多様性に起因するものなのだろうか、もしくは文法現象の歴史的変化を反映しているのか、それともそこにはこれらと性質の異なる言語に関する事実が隠れているのだろうか？

本プロジェクトでは、文法記述において先行研究における定説とは異なる分析がより適切であったり、データが定義にすっきりと当てはまらない具体的な例をとりあげ、具体的なデータを見ながらその示唆する内容について考察する。このために、類型論的にも地理的にも多様な言語を専門とする研究者をメンバーとする。

梅谷　博之　　大角　翠　　奥田　統己　　風間伸次郎　　菊澤　律子　　北野　浩章
桐生　和幸　　栗林　裕　　小森　淳子　　佐々木　冠　　沈　力　　鄭　聖汝
角田　太作　　當野　能之　　中村　渉　　野瀬　昌彦　　林　徹　　匹田　剛
PRASHANT Pardeshi　　Mark Campana　　箕浦　信勝　　山田　久就　　米田　信子
Ratcliffe, Robert R.　　渡辺　己

所外代表による共同研究プロジェクト

音韻に関する通言語的研究　（主査：梶　茂樹／所員 13、共同研究員 46）

言語学の本来の研究分野は、音韻、形態、統語、意味であるが、そのなかでも音韻論は、長らく他の研究分野をリードしてきた。本研究プロジェクトは、音韻論のなかでも声調（tone）を中心とする超分節素（suprasegmentals）の研究をおこなう。

世界に、声調言語は意外と多い。中国語諸方言やチベット・ビルマ系諸語、またベトナム語、タイ語などの東南アジア諸語、バンツー系やクワ系などのニジェール・コンゴ諸語、マサイ語やナンディ語などのナイル系諸語、南部アフリカのコイ・サン諸語、またアフロ・アジア系の中でもチャディック諸語、さらにはニューカレドニア諸語やアメリカ・インディアン諸語など。

また、日本語やインド・ヨーロッパ系のスウェーデン語やセルボ・クロアティア語などのピッチ・アクセント諸語の研究も重要である。

具体的な研究テーマとしては、声調、音調、アクセントなどの用語の整理と同時に、次のようなものが考えられる。

(1) 声調（正確にはピッチ）の音声学的特性
(2) 子音、母音といった分節素との関係
(3) 個々の言語における声調の体系
(4) 声調の語彙的、文法的機能
(5) 声調言語とアクセント言語との違い
(6) 世界の声調言語のタイポロジー
(7) 声調の通時的変化と比較研究
(8) 声調の発生と消滅

鮎澤　孝子	池田　巧	生駒　美喜	市田　泰弘	伊藤　英人	岩田　礼
上田　広美	宇佐美（前田）洋		上野　善道	遠藤　光暁	大江　孝男
岡崎　正男	加藤　昌彦	角谷　征昭	上岡　弘二	神谷　俊郎	木部　暢子
久保　智之	窪薗　晴夫	郡　史郎	坂本　恭章	品川　大輔	清水　克正
杉藤美代子	鈴木　玲子	田中　伸一	壇辻　正剛	Donna Erickson	
中井幸比古	長尾　美武	中嶋　幹起	中西　裕樹	中野　暁雄	長野　泰彦
新田　哲夫	早田　輝洋	原口　庄輔	平山　久雄	福井　玲	堀　博文
松森　晶子	箕浦　信勝	藪　司郎	湯川　恭敏	吉田　浩美	米田　信子



◆「シュエダゴン＝パゴダのメンテナンス風景」
ビルマ語でピッサヤーと呼ばれるパゴダ基部の表面の金箔をはがし、張り替える前に地の部分を磨いているのだと思われる。色からみて「地金」は銅であろうか。黄金に輝くビルマ仏教徒の誇りも、この期間だけは一休みの風情。
（ミャンマー連邦ヤンゴン、シュエダゴン＝パゴダ、2005 年 1 月 10 日、澤田英夫撮影）

国際シンポジウム

共同利用研究所としてのアジア・アフリカ言語文化研究所は、文部科学省「中核的研究機関支援プログラム」（平成7年度から13年度まで）により「卓越した研究拠点」（COE:Center of Excellence）に指定されて以降、学術研究の情報化、国際化にこれまで以上重点をおいた事業を展開しています。

国際化の面では、国内外の先端的な研究を行っている研究者を招聘し、国際シンポジウムを開催しています。本研究所が日本における人文社会科学の分野で先導的な研究を推進していく上で、国際的な学術交流は、今後ますます重要な活動となっていくことは間違いありません。

これまでに開催されたシンポジウム、及び平成16年度に予定されているシンポジウムは以下のとおりです。

シンポジウム名	開催期間	参加者
東南アジアにおける人の移動と文化の創造	1996.12/3 ～ 5	国内　45名 国外　12名
音調の通言語的研究 —声調の発生、類型および関連研究—	1998.12/10 ～ 12	国内　45名 国外　16名
南アジアにおける言語接触と収束的発達	1999.12/6 ～ 9	国内　43名 国外　17名
音調の通言語的研究 —音調の発生、日本語アクセント論および関連研究—	2000.12/12 ～ 14	国内　73名 国外　24名
非主格の「主語」をめぐって	2001.12/18 ～ 21	国内　95名 国外　29名
音調の通言語的研究 —歴史的発展、音声学的基盤および記述研究—	2002.12/17 ～ 19	国内　92名 国外　25名
境域社会のダイナミクス —東南アジアにおける国境地域の比較—	2003.12/10 ～ 12	国内　81名 国外　10名
インド系文字　—過去そして未来—	2003.12/17 ～ 19	国内 100名 国外　40名
人間の安全保障～いま「現地」に立ちもどって考える～（地域研究による「人間の安全保障学」の構築プロジェクト）	2004.11/10	国内 250名 国外　2名
アサバスカの再活性化における相互交流	2004.2/16 ～ 18	国内　80名 国外　8名
ネパールの社会政治動態	2004.2/28 ～ 29	国内　40名 国外　6名
在臺灣發現日本～台湾における日本認識	2004.3/27	国内　56名 国外　2名
北部南アジアの社会動態	2004.6/25 ～ 27	国内　45名 国外　15名
Thinking Malayness	2004.7/19 ～ 21	国内　70名 国外　18名
日本占領期ビルマの歴史的検証（1942–45）	2004.10/9 ～ 10	国内　83名 国外　2名

シンポジウム名	開催期間	参加者
レバノン内戦再考（1975–1990）	2004.11/3	国内　37名 国内　3名
現代アラブ世界における歴史研究：マグリブとマシュリクから	2004.11/4	国内　38名 国内　2名
音調に関する通言語的研究 —歴史的発展、音声学的基盤および記述研究—	2004.12/14 ～ 16	国内　68名 国内　24名
9.11後の世界における政治的暴力と人間の安全保障（地域研究による「人間の安全保障学」の構築プロジェクト）	2004.12/18 ～ 19	国内　174名 国内　20名
在臺灣發現日本～台湾における植民地支配と日本～	2005.3/5 ～ 6	国内　名 国内　名
台湾原住民研究～日本と台湾、過去と現在	2005.3/26 ～ 27	国内　名 国内　名



ナミビア東北端の町カティマ・ムリロの市場で。ザンベジ河畔に位置するこの町では、川向こうのザンビアとの間での人々の往来も盛んである。（2002年9月、永原陽子撮影）

外国人研究者招へい

本研究所は、国際的な共同研究を実施するために、海外からアジア・アフリカの研究者を外国人客員研究員として招聘しています。これらの研究者は、研究の内容に応じて研究ユニットないしセンターに配置されます。また、日本学術振興会や国際交流基金の招聘計画などで来日する海外の研究者を外国人フェローとして積極的に受け入れ、学術交流を推進しています。過去3年間に受け入れた研究者は以下のとおりです。

（※は外国人フェロー）

2003	Faucher, Carole	カナダ	社会学
	Gellner, David N	イギリス	社会人類学、インド学
	Kisseberth, Charles Wayne	アメリカ合衆国	言語学
	Tirtosudarmo, Riwanto	インドネシア	社会人口学
	Leer, Jeffry Alan	アメリカ合衆国	言語学
	※ Kari, Ethelbert Emmanuel	ナイジェリア	言語学
	※ Sudebilige, Shirnuut	中国	歴史学
	※方素梅	中国	中国近代民族史
	※ Hanjabam, Surmangol Sharma	インド	言語学
	※ Joyce, Terry Andrew	イギリス	言語学
	※ Oehler, Susan Elizabeth	アメリカ合衆国	民族学
2004	Razafiarivony, Michel	マダガスカル	民族学
	Motingea, Andre Mangulu	コンゴ	言語学
	Mkude, Daniel Joseph	タンザニア	言語学
	Benhadda, Abderrahim	モロッコ	歴史学
	Witzel, Michael	ドイツ	言語学
	※ Beckwith, Christopher I.	アメリカ合衆国	言語学、中央ユーラシア・東アジア研究
	※ Mikhajlovich, Sangi Vladimir	ロシア連邦	言語学、口承文学
	※ Rosalind Ruth, Roberts-Kohno	アメリカ合衆国	言語学
	※ Daher, Massoud	レバノン	歴史学
	※ La Minh Hang	ベトナム	言語学
	※王菊	中国	教育管理学
2005	Sefatgol, Mansur	イラン	歴史学
	Kedit, Peter Mulok	マレーシア	社会文化人類学
	Brenzinger, Matthias	ドイツ	アフリカ言語学、アフリカ史
	Pudjiastuti, Titik	インドネシア	インドネシア文献学、歴史学
	Subbarao, KarumuriVenkata	インド	言語学

外国研究機関との共同研究

本研究所は、かねてより海外の研究機関と研究資料・情報の交換、研究員の相互交流、共同研究調査の実施等を通じ学問上の国際協力を進めてきましたが、最近はさらにこれらの機関のいくつかと正式に学術協定を結び、国際協力の一層の充実を図ろうとしています。これまでに学術協定を結んだ研究機関名と締結年および共同で実施した事業等は、以下のとおりです。

（外国機関名（略号）／締結年／国名）

パリ人間科学館（MSH）2005.　フランス

人間・社会・自然に関する先端科学の成果および古代から現代に至る諸文明の伝統を視野に収める総合人間学の構築に向け、ヨーロッパの研究者との共同研究を実施するための協定である。

レバノン大学人文科学部第 1 部（FHS-I-LU）2005.　レバノン共和国

レバノンに開設予定の現地研究拠点での活動を想定し、各々の専門と研究計画にとって相互補完的であるような共同研究について協議を開始するために、学術協力協定を締結した。

ドイツ東洋学会ベイルート・ドイツ東洋学研究所（OIB）2005.　レバノン共和国

レバノンに開設予定の現地研究拠点での活動を想定し、各々の専門と研究計画にとって相互補完的であるような共同研究について協議を開始するために、学術協力協定を締結した。

アフリカ演劇コミュニケーション研究・育成・創成センター（CARAS）　2004.　コートディヴォワール共和国

本研究所海外研究拠点化計画における西アフリカ拠点として学術研究協力協定を締結し、同地域で近年頻発する内戦・民族紛争など、人間の安全保障をめぐる緊急の課題にむけた共同研究計画を目下立案中である。

オーストリア科学アカデミー（AAS）2004.　オーストリア

オーストリア共和国の研究機関であるオーストリア科学アカデミー（AAS）との補完的な相互協力を目的として、学術協定が締結された。具体的には、オーストリア科学アカデミー・アジア研究所（AAS-IAS）が行っている仏教文献の校訂プロジェクトに関連して、仏教文献データベースとテキスト情報処理について相互協力を行っていく。

インドネシア科学院社会文化研究センター（PMB-LIPI）2000.　インドネシア

インドネシアの研究者との共同研究、セミナー、研究交流などの推進をはかるため、学術交流に関する申し合わせ。この申し合わせに基づき、2000 年度より、国際学術研究「ボルネオとその周辺部における移民・出稼ぎに関する文化人類学的研究」による共同研究、研究セミナー、研究者の交流を実施している。

情報文化省文化研究所（IRC）1997.　ラオス

「シャン文化圏」プロジェクトを円滑に進めるため、ラオスとの共同研究を目的として学術協力協定が締結された。

農業計画・経済研究センター（CAPES）1996.　イラン

国際学術研究「イスラム圏における人間移動と共生システムに関する調査研究」の実施を契機に、将来幅広くイラン文化と日本文化に関する共同研究プロジェクトを組織する目的で研究協力協定が締結された。両研究機関の共同研究員に、研究員と同等の便宜と援助をおこなうことになっている。

人文科学研究所（ISH）1988.　マリ

文部科学省科学研究費補助金による現地調査「ニジェール川大湾曲部諸文化の生態学的基盤および共生関係の文化人類学的研究」を継続的に実施し、その成果を Boucle du Niger: Approches multi-disciplinaires, Vol.1.（1988）、Vol.2.（1990）、Vol.3.（1992）として刊行した。

チベット言語文化研究所（LCAT）1988.　フランス

敦煌の古代チベット語文献のデータベース化を行なっているが、その一部の KWIC 索引は、Choix de Documents Tib tains　la Biblioth que Nationale III Corpus Syllabique として、フランス国立図書館から 1990 年に出版された

インド統計研究所（ISI）1987.　インド

ISI 特別客員研究員本研究所来所、共同研究（1985–86）、経済研究部長来訪（1988）：本研究所所員 ISI 訪問（1987, 88, 89, 90, 91）：共同研究プロジェクト「電算機補助によるラビンドラナート・タゴールの言語の分析的研究」を実施中（1987–）：電算資料シリーズ 3 冊発行（1987, 88, 90）。

インド諸語中央研究所（CIIL）1987.　インド

CIIL 所長本研究所訪問（1983）、副所長来訪（1985）、所員来所、共同研究（1984–85、1991–92）：本研究所所員 CIIL 訪問（1982, 87, 88, 89, 91, 92）：共同研究プロジェクト「南アジア諸言語の研究とそのデータベースの作成」を実施、共同研究年次報告書発行（1990, 91, 92）。

国立科学技術研究機構（ONAREST）（現・高等教育・情報科学・科学研究省（MESIRES））1978.　カメルーン

文部科学省科学研究費補助金による現地調査「アフリカ部族社会の比較調査」（1969–76）におけるカメルーンとの共同研究を経て、カメルーン国立科学技術研究機構の人文科学研究所所長を招へい、本研究所で協定締結（1978）。所員の現地における共同研究（1980–81, 82, 84, 86）：カメルーン研究者の現地調査参加（1982, 84, 86, 87, 89, 90, 91）：本研究所におけるカメルーン研究者の成果刊行、単行本 8 冊（African Languages and Ethnography シリーズ）、論文 1 点（*Sudan Sahel Studies* 所収）。

図書資料コレクション

本研究所は全国共同利用研究所として，アジア・アフリカ諸地域の言語文化に関する研究に必要な基礎資料を，1964（昭和 39）年の創設以来収集してきました。とくに海外約 50 カ国，150 研究機関とのあいだで，寄贈・交換により資料を継続的に集めています。現在，その総数は，図書 11 万冊，雑誌約 1,220 タイトル，マイクロフィルム 1 万余リール，マイクロフィッシュ 3 千余に達していますが，このほかにも古文書，地図，写真，ヴィデオや，さらには CD-ROM などのあらたな媒体もふくまれています。カンボジア語版南伝大蔵経は，カンボジアの戦乱により現地では散逸しましたが，本研究所蔵本をもとに複製版がつくられ，カンボジアの文化教育機関，寺院に寄贈されて，かの地の文化復興に貢献しました。また、浅井恵倫博士旧蔵資料（台湾先住民関係の土地契約文書，動画，写真，語彙集，用例集，フィールドノート，参考文献類）は，海外研究者の協力もえて整理が完了し，研究所ホームページで公開されとともに，研究所で展覧会が開催され、内外研究者の関心を集めました。

このほかにも，オスマン語劇場ポスター，ナポレオン「エジプト誌：第 2 版」，19 世紀「カイロ石版画集」コレクション，19 世紀末からのイランの主要新聞 65 種，19 世紀末に創刊されたベンガル語文芸雑誌のバックナンバー，中国清代の製糖法を伝える画集，清代台湾民俗図，清代モンゴル語仏典，ロシア帝国で出版されたモンゴル語聖書，満洲国駐タイ公使館文書など，貴重な文献資料がふくまれています。三浦周行氏旧蔵品もふくむ，朝鮮王朝古文書類コレクションや，清代公文書コレクションは，近年入手されたものですが，現在も継続して収集が続けられております。

アジア・アフリカ研究における先覚者の個人文庫では，山本謙吾（満洲語研究），浅井恵倫（オーストロネシア語研究），小林高四郎（モンゴル史研究），前嶋信次（イスラーム研究），王育徳（台湾語・文化研究）諸氏の蔵書が保管されています。

府中キャンパスへの移転にともない，これらのコレクションのうち，一般図書，個人文庫類は附属図書館内に設置された AA 研コーナーに別置配架され，貴重書，参考図書，大型本，叢書，マイクロフィルム類，雑誌は研究所棟の 1 階にある文献資料室で閲覧できます。なお附属図書館 AA 研コーナーにある図書は，ほかの附属図書館蔵書とともに，共同研究員，研究生も館外貸出しのサーヴィスをうけられます。

国立国会図書館のアジア関係図書は，関西館新設にともない移転しましたが，その意味では，東洋文庫と並んで，関東地区における AA 研図書資料コレクションの意義と役割は益々重要なものとなりましょう。

なお，AA 研所蔵の図書資料の利用方法については，AA 研のホームページ（http://www.aa.tufs.ac.jp/）及び東京外国語大学附属図書館（http://www.aa.tufs.ac.jp/library/）のホームページをご覧ください。



競争的研究経費などによる研究

本研究所では、臨地研究、アジア・アフリカの言語文化に関する研究を展開し、また研究成果の情報化などをより一層推進する為に、「科学研究費補助金」や民間の財団による研究助成に積極的に応募して研究経費を獲得しています。また、最近では、民間機関などと共同で行う研究プロジェクトが発足し、研究成果のより実践的な応用等にも貢献しています。

以下で紹介するのは、所員が代表者になって行われている種々のプロジェクトです。

H17 年度 科学研究費補助金プロジェクト

研究種目	課　題　名	所 員 名	採択期間
特別推進（COE）	アジア書字コーパスに基づく文字情報学の創成（GICAS）	Bhaskararao, Peri	H13 ～ H17
特定	象徴資源と生態資源への人類学的アプローチ	内堀 基光	H14 ～ H18
〃	知識資源の共有と秘匿	クリスチャン. ダニエルス	H14 ～ H18
〃	小生産物（商品）資源の流通と消費	小川　　了	H14 ～ H18
基盤 A	地方独立制移行期マダガスカルにおける資源をめぐる戦略と不平等の比較研究	深澤　秀夫	H14 ～ H17
〃	未調査のバントゥ諸語および隣接諸言語の記述・比較研究	加賀谷良平	H15 ～ H17
〃	新たな東地中海地域像の構築―民族・宗派対立と人間移動	黒木　英充	H16 ～ H19
〃	東南アジアにおける中国系住民の土着化・クレオール化についての人類学的研究	三尾　裕子	H16 ～ H19
〃	南アジア・東南アジア地域小数民族言語の語彙・文法調査	Bhaskararao, Peri	H17 ～ H19
〃	高齢化社会と国際移住に関する文化人類学的研究：東南アジア・オセアニア地域を中心に	宮崎　恒二	H17 ～ H20
基盤 B	仏領西アフリカの植民地統治をめぐる住民側の記憶とその文字化保存に向けた調査	眞島　一郎	H14 ～ H17
〃	1990 年代半ば以降のイスラーム世界におけるジハード理論の変容と実践の研究	飯塚　正人	H14 ～ H17
〃	ビルマ地誌フォーラム―企画・調査・試験的公開―	澤田　英夫	H15 ～ H17
〃	複統合性をめぐる北東シベリア・北アメリカ先住民言語の比較研究	呉人　徳司	H16 ～ H19
〃	「植民地責任」論からみる脱植民地化の比較歴史学的研究	永原　陽子	H16 ～ H18
〃	多言語辞書データベースに基づくキリシタン文献対訳辞書類の語彙体系の統合的研究	豊島　正之	H17 ～ H18
〃	言語・文化調査に基づくパラウン史の解明	新谷　忠彦	H17 ～ H20
基盤 C	東アフリカ牧畜社会における実践空間の認識と地図表象化：ディジタル解析の応用	河合　香吏	H15 ～ H17

研究種目	課　題　名	所　員　名	採択期間
〃	スールー海域世界におけるサマ語系民族集団の移動と越境に関する文化人類学的研究	床呂　郁哉	H16 ～ H19
〃	第二次世界大戦直後におけるソ連勢力圏の形成とスターリンの対外認識	栗原　浩英	H16 ～ H17
萌芽	民話研究におけるゲノム情報学の援用	小田　淳一	H15 ～ H17
データベース（重点）	「言語学大辞典」データベース	町田　和彦	H16 ～ H18
データベース（一般）	国際学術研究調査関係研究者データベース	眞島　一郎	H17
若手Ｂ	イランにおけるイスラーム法と都市社会	近藤　信彰	H15 ～ H17
〃	電子化コーパスに基づくチベット語動詞データベースの構築	星　　泉	H15 ～ H16
〃	言語学・文献学的観点から見た西夏とチベットの相関についての基礎的研究	荒川慎太郎	H16 ～ H18
〃	中期朝鮮語アクセント辞典作成	伊藤智ゆき	H16 ～ H17
〃	中国古文字偏旁体系の構築	陶安あんど	H17 ～ H18
〃	バリ語（インドネシア）の形態、統語、意味にかかわる包括的研究	塩原　朝子	H17 ～ H19
〃	東アフリカ多民族共存地域における環境認識の比較研究	衣笠　聡史	H17 ～ H19

H17 年度受託研究プロジェクト

課　題　名	所　員　名	機　　関
人文学分野に関する学術動向及び学術振興方策に関する調査・研究	石井　　溥	㈱日本学術振興会
平和構築に向けた知の展開（地域研究による「人間の安全保障学」の構築）	黒木　英充	㈱日本学術振興会
言語間デジタルデバイド解消のための方策に関する研究	町田　和彦	㈱科学技術振興機構

H16 年度その他各種財団助成によるプロジェクト

課　題　名	所　員　名	機　　関
日本占領期ビルマ（1942 ～ 45）に関する総合的歴史的研究	根本　　敬	トヨタ財団
インドネシア津波災害文化財復興支援事業	宮崎　恒二	文化財保護・芸術研究助成財団

アジア書字コーパス拠点（GICAS）

GICAS 「アジア書字コーパス拠点」は、文部科学省の COE 拠点形成・特別推進研究（COE）「アジア書字コーパスに基づく文字情報学の創成」（Grammatological Informatics based on the Corpora of Asian Scripts）によって平成 13 （2000）年～ 17 （2004）年度の 5 年度にわたり約 5 億円の助成金を得て形成される「COE 研究拠点」の一つです。

GICAS 拠点が体系化を目指す「文字情報学」は、アジアにおいてとりわけ豊饒な「文字」を情報通信の基盤メディアとして捉え直し、ここに国際的な文字情報通信で求められる学問的基礎を与えることを目的とする新しい学問領域です。

GICAS は、研究所の従来の研究活動をいっそう拡充して、統計的解析を行うに十分な規模の資料体（コーパス）としてアジア各地に蓄積される書字文化資料の「アジア書字コーパス」を構築します。

各地に伝存する碑文・石経、諸宗教聖典の宮廷写本など、本文・字体の双方に規範を示すために作成された聖典書字資料はアジア各地に残存しますが、この電子化を中心とした「アジア書字コーパス」（Corpora of Asian Scripts ）は、そこに投影されるアジアでの文字学問研究の伝統と文字使用文化の歴史の電子的な体現であり、「アジア書字コーパス」を現代の情報処理技術で実装することで、検証可能性を持つ新たな学問領域「文字情報学」の創成と体系化の基盤とすることができます。

「アジア書字コーパス」の実装は、文字情報処理に確固たる学問的基盤を与えることを意味し、これによって「アジア書字コーパス」に文字情報学の国際的レファレンス・センターとしての国際的な認知を得て、アジアの文化に根差した文字学研究・文字情報処理においても、我が国が主導的な立場に立つ事を目指すものです。

GICAS の活動は 5 年度中の最終年度に入り、各メンバーが精力的に活動して、コーパスの構築・書字文化研究に努めています。

GICAS は独自のインターネット・ドメインを取得済です。GICAS のホームページは http://www.gicas.jp/ で、そこにこれまでのの研究成果などが公開されているので、是非ご参看ください。



資源の分配と共有に関する人類学的統合領域の構築
～象徴系と生態系の連関をとおして～

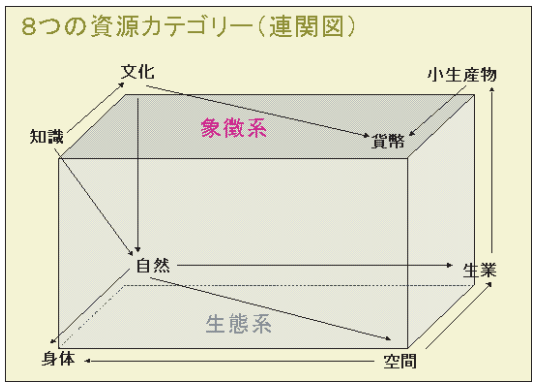
人類社会は象徴系資源と生態系資源という連関する二つの基盤のうえに成り立っています。

この連関の様相を実証的かつ理論的に解明する人類学の新たな統合領域を構築することによって、天然資源のみならず、人工的二次的物的資源、さらには無形の知的・文化的資源をも包含する広義の「資源」の分配と共有をもって人類社会の根底的機序とするという視座を確立します。この基本的視座の確立は、地域社会、国家、あるいは国家を超える広域の人間社会の変容および適応という動態過程を統一的に分析することを可能にします。逆にまた視座の有効性は、こうした動態分析によって保証されます。本領域は、人類学に新たな可能性を拓くとともに、現代世界の周辺における動態的局面の根底的解明を目指します。

文部科学省科学研究費補助金「特定領域研究」として、平成14年（2001）～18（2005）年度の5年間にわたり行なわれる研究の成果及び活動内容については、独自のホームページ（http://shigenjin.aa.tufs.ac.jp/）にて公開しています。

ー計画研究ー

『象徴資源と生態資源への人類学的アプローチ』（総括班）
『文化資源の生成と利用』
『知識資源の共有と秘匿』
『小生産物（商品）資源の流通と消費』
『贈与交換経済における貨幣資源の浸透』
『自然資源の認知と加工』
『生態資源の選択的利用と象徴化の過程』
『資源と生態史ー空間領域の占有と共有』
『身体資源の構築と配分における生態、象徴、医療の相互連関』





研究未開発言語文化の調査事業

これまで研究の蓄積のないアジア・アフリカの言語文化に関する資料を収集し、それらの研究を促進するため、本研究所では、研究者をアジア・アフリカの諸国及びそれらの旧宗主国に計画的に派遣しています。これまで派遣された研究者ならびに派遣先は以下の通りです。

1967-1969	石垣幸雄（エチオピア）、守野庸雄（タンザニア）
1969-1971	松下周二（ナイジェリア）、家島彦一（アラブ連合）
1971-1973	内藤雅雄（インド）、中野暁雄（モロッコ、南イエメン）
1973-1975	福井勝義（ソマリア）、中嶋幹起（香港）
1975-1977	加賀谷良平（ボツワナ）、湯川恭敏（タンザニア、ザイール）
1977-1979	石井　溥（ネパール）、藪　司郎（ビルマ）
1979-1981	羽田亨一（イラン、トルコ）、清水宏祐（アラブ連合、イラン、トルコ）
1981-1983	山本勇次（ネパール）、新谷忠彦（ニューカレドニア）
1983-1985	辻　伸久（中国、香港）、水島　司（インド）
1985-1987	中見立夫（中国、モンゴル）、梶　茂樹（ザイール、ケニア、ザンビア）
1987-1989	松村一登（フィンランド、ソ連）、宮崎恒二（オランダ、インドネシア）
1989-1991	林　　徹（中国、トルコ）、栗本英世（エチオピア、ケニア）
1991-1993	栗原浩英（ベトナム、ロシア）、峰岸真琴（インド）
1993-1995	新免　康（中国、独立国家共同体、イギリス）、根本　敬（イギリス、タイ）
1995-1997	飯塚正人（エジプト、イギリス）、黒木英充（シリア、フランス）
1997-1999	吉澤誠一郎（フランス、イギリス、中国、台湾）、西井凉子（タイ、イギリス）
1999-2001	澤田英夫（オーストラリア、インド）、本田　洋（韓国、イギリス）
2001-2003	床呂郁哉（スペイン、オランダ）、呉人徳司（アメリカ、ロシア）
2003-2005	陶安あんど（イギリス、フランス、中国）、太田信宏（イギリス、インド）



◆ヒジャーズ鉄道の機関車

メッカへの巡礼者を運んだイスタンブール／メディナ間のヒジャーズ鉄道は「アラビアのロレンス」に爆破されて廃線となった。現在ではアンマン（ダラー）／ダマスカス線が週２便（但し片道を１便として）運行されているらしい。何度もあった幻の再建計画は最近日本のさる機関と某商社の実名が挙げられて現実味を帯びているそうだがこれも幻に終わるのだろうか。
（サウジ・アラビア王国アル・ウラ市近くの鉄道工場跡，2000年２月10日，小田淳一撮影）

言語研修

本研究所では、アジア・アフリカ地域の言語の修得のために、本研究所所員を中心にその言語を母語とする人、および日本人研究者を講師として、毎年夏、言語研修を開講しています。これまで言語研修を実施した言語は、次の通りです。

研修言語名（修了者数）

年度	東京会場	関西会場
1974	朝鮮語（10）、チベット語（12）	
1975	カンボジア語（8）、ベンガル語（12）	
1976	ペルシア語（10）、スワヒリ語（9）	ビルマ語（5）
1977	広東語（14）、マラーティー語（6）	モンゴル語（18）
1978	タイ語（12）、トルコ語（12）	ペルシア語（13）
1979	ハウサ語（8）、ビルマ語（14）	タイ語（7）
1980	ネパール語（14）、モンゴル語（14）	ベトナム語（5）
1981	ヒンディー語（8）、パシュトー語（10）	中国語中級（26）
1982	アラビア語エジプト方言（12）、ハンガリー語（17）	フルフルデ語（12）
1983	チベット語（12）、フィンランド語（21）	パンジャーブ語（8）
1984	ピリピノ語（タガログ語）（12）、ヨルバ語（3）	トルコ語（15）
1985	朝鮮語（14）、カンボジア語（10）	スワヒリ語（8）
1986	西南官話（5）、タミル語（12）	ベンガル語（8）
1987	中原官話（10）、タイ語（19）	シンハラ語（8）
1988	ペルシャ語（10）、トルコ語（16）	インドネシア語（6）
1989	ベンガル語（20）、ベトナム語（9）	アラビア語エジプト方言（15）
1990	朝鮮語（11）、インドネシア語（11）	ペルシア語（14）
1991	エストニア語（12）、ビルマ語（15）	中国語（13）
1992	ネパール語（12）、アラビア語エジプト方言（15）	フィリピノ語（12）
1993	朝鮮語（17）、グルジア語（17）	モンゴル語（17）
1994	ウォロフ語（9）、ヒンディー語（11）	トルコ語（22）
1995	アムハラ語（5）、チベット語（25）	上海語（12）
1996	タイ語（14）、現代ヘブライ語（12）	ヨルバ語（7）
1997	テルグ語（10）、モンゴル語（11）	ハンガリー語（7）
1998	アイヌ語（2）、ハヤ語（11）	カンナダ語（5）
1999	フィジー語（4）、ペルシア語（10）	ウルドゥー語（5）
2000	シャン語（3）、アフリカーンス語（6）	ペルシア語（4）
2001	パシュトー語（7）、福州語（10）	ムンダ語（3）
2002	ネワール語（8）、バリ語（7）	タイ語（7）
2003	マダガスカル語（11）、スンダ語（5）	ベトナム語（11）
2004	ビルマ語中級（6）、ベンガル語（11）	カザフ語（3）
2005	ベトナム語中級、シンハラ語	ヒンディー語

実施にあたっては、語学教育に造詣の深い所外の専門委員と担当講師および所員がプロジェクトチームを組み、教授法、実施方法や評価についての議論を行い、効果的な研修を目指しています。

研修は以下の能力の習得を目標としています。

（1）口語および書き言葉の能力をつける

（2）言語の科学的研究と実際的応用の訓練の提供

（3）大学院相当の学生に野外調査を実施するための手段としての言語習得の援助

研修生は、大学などの研究機関を通じて全国から公募します。研修を修了した人には審査のうえ、修了書が授与されます。尚、本研究所は、名古屋学院大学及び清泉女子大学と単位互換協定を結んでおり、研修を修了すると、それぞれの大学の卒業単位として認定されます。

音声学解析

近代の音にかかわる科学、すなわち音声科学、音声学、音韻論等は音の物理量の測定と分析から始まり、その成果が現在の様々な理論に発展してきています。本研究所では、このような音の基礎研究に関する分析や実験が行えるように、様々な機器を備えています。

現在、本研究所に備え付けている言語音の分析機器の主力は、パソコンとそれにインストールされている音声分析ソフトウエアです。テープレコーダやマイクロフォンからの音声を一時パソコンに録音して、そのパソコン内の資料をソフトで分析します。パソコンにはMacintoshとWindowsが用意されています。

どちらの種類の分析ソフトも、サウンドスペクトログラフ、フォルマント周波数の測定、基本周波数の測定、音の持続時間、音圧測定等の音声分析に必要な物理量を自在に測定することが出来ます。連続した一つの音声資料（1ファイル）の録音時間はMacintoshでもWindowsでも、44k程度のサンプリングでほぼ1時間半から2時間録音できます。なお、このパソコンへの長時間録音だけに適したソフトも用意されています。パソコンの音声入出力装置としてはDATテープ、カセットテープ、DVD、MD、CD等の媒体が利用できます。この他音声実験に必要な他の機器の導入も計画されています。また、現在はMacintoshには映像解析ソフトがインストールされており、VHSのビデオコーダを入出力装置として使えます。

なお、本研究所には、新キャンパス移転以前から、その時々の日本における最先端の録音技術を用いて様々なアジア・アフリカの言語の語学テープを録音してきました。また所員をはじめとする研究者が野外調査で収集してきた世界の珍しい言語資料や、民話、民族音楽のテープやレコードも保管しています。新キャンパスへ移転後も、静かな環境で高品質の録音が可能な防音スタジオを用意し、録音機器としてもDATとカセットの高品質テープレコーダを備えています。

録音媒体の変換用機器も用意されている。すなわちDATカセットテープ、アナログカセットテープ、CD、DVD、MD媒体の録音が相互に他の媒体に録音できます。

これらの機器を利用するためのマニュアル類は実験室に用意されています。



◆中国内蒙古自治区・フフホト
市のはずれでは昔ながらの露店。急速に現代化が進む中国の地方都市。舗装されていない路上に食料品店が並ぶ風景も減りつつある。
（フフホト，2004年9月，荒川慎太郎撮影）

大学院

東京外国語大学では、多元化した言語・文化・歴史・政治・経済などを統合し、かつ深く掘り下げうる教育者・研究者の育成という学術的な要請と、国際交流の高度化・複雑化に伴う高度な知識を有する国際的な人材や専門職員の需要に応ずるために、言語教育と地域研究をより高度に発達させた大学院地域文化研究科博士後期課程を1992（平成4）年度より設置しました。本研究所では教育体制のこうした発展に協力すべく、大学院地域文化研究科にAA研コース会議を設置し、23名（2005年度）の教官が参加し、言語学・民族学・文化人類学・歴史学などの分野における学生を受け入れ、教育活動に従事することとなりました。

これまで、本研究所の教官を主任指導教官として研究を行い、学位を取得した大学院生の氏名、論文題目、学位取得年月日は、以下の通りです。

学位授与者一覧（AA研）

2005年4月現在

授与日	氏　名	学位論文題目
1995.3.24	Ricard T. Jose	Food Administration in the Philippines during the Shortage and Occupation, 1942–1945: Focusing on the Rice Countermeasures
1996.3.25	鈴木貴久子	マムルーク朝時代の料理書『日常食物誌』を中心とするアラブ・イスラーム世界の食生活研究
1998.3.26	吉枝聡子	現代ペルシア語の敬語行動に関する社会言語学的研究―テヘランの場合―
1998.4.22	Soysuda Naranong	日本語の終助詞「よ」・「ね」・「よね」について―日本語教育の視点から―
1999.3.26	榮谷温子	アラビア語における限定・非限定の意味と機能
2000.3.24	米田信子	マテンゴ語の記述研究（バンツー系、タンザニア）―動詞構造を中心に―
2000.6.21	小坂隆一	A Descriptive Study of the Lachi Language ― Syntactic Description, Historical Reconstruction and Genetic Relation ―
2002.3.26	鄧応文	1990年代における中越経済関係―国境貿易を中心にして―
2002.3.26	高久由美	漢字形成史研究―先秦時代の漢字体系における「説文留文」の位置付け―
2002.7.24	菅原由美	19世紀中部ジャワ宗教運動研究―アフマッド・リファイ運動をめぐる言説―
2002.12.18	禅野美帆	村落と都市の紐帯―メキシコ、オアハカ州サン・マルティン村のカルゴ・システム
2003.3.26	Kari, Ethelbert Emmanuel	Clitics in Degema: A Meeting Point of Phonology, Morphology and Syntax
2003.3.26	黒澤直道	中国少数民族口頭伝承の研究－ナシ（納西）語音声言語の検討による「トンパ（東巴）文化」の再検討－

日本学術振興会特別研究員

特別研究員（PD）

本研究所では、大学院博士課程修了者で、優れた研究能力を持つ若手研究者を、「日本学術振興会特別研究員（PD）」として受け入れ本研究所の教員と共同研究を推進しています。平成17年度、本研究所に在籍する特別研究員は以下の通りです。

氏　名	資　格	研究指導者	採用年度
児玉　茂昭	PD	高島　淳	H15～
井上　さゆり	PD	根本　敬	H16～
市川　哲	PD	三尾　裕子	H17～

外国人特別研究員

諸外国の博士号取得直後の若手研究者を最長2年間受け入れ、所員と共同研究を行っています。

氏　名	資　格	研究指導者	採用年度
Sudebilige, S.	外国人特別研究員	中見　立夫	H15～
La, H. M.	外国人特別研究員	三尾　裕子	H16～



◆イラワジ川のほとりにたたずむ尼僧
（ミャンマー，パガン，塩原朝子撮影）

2 研究成果の公開

研究の社会還元

本研究所は創立以来、全国共同利用研究所として、国内の研究機関に所属する専門研究者に設備や資料を提供する一方、共同研究プロジェクト等の開催を通じて研究交流の機会を作り、日本における当該分野の研究進展に大きな足跡を残してきました。しかし、国際化の進展やアジアの著しい経済成長、またアジア・アフリカにおける民族・宗教対立の激化など、国際情勢の変化にともなって、本研究所の研究蓄積に対する一般社会の期待は年々大きくなっています。そこで、本研究所もこのような期待に応えるために、研究とともに、「教育」型の社会還元を実施しています。2001 年度以降に実施した公開講座は以下の通り。

公開講座の実施

2001 年度

本研究所主催「現代チベット語講座 1 入門編」(6 月 19 日から半年：毎週火曜日に開催、講師：星泉)
本研究所主催「現代チベット語講座 2 読解編」(6 月 22 日から半年：毎週金曜日に開催、講師：星泉)
財団法人東京都勤労福祉協議会主催・本研究所後援「南西アジアの最新社会経済事情―イスラムの国々とインド」(7 月：全 8 回 16 時間、講師：飯塚正人、内藤雅雄、町田和彦及び所外 1 名)
渋谷区教育委員会千駄ヶ谷社会教育館主催・本研究所後援「イスラム史」(1－2 月：全 8 回 16 時間、講師：飯塚正人)
文部科学省主催「アジア－多様な文字へのまなざし：パート Ⅱ」衛星通信による連続講座（エルネット）(2001 年 9 月、10 月 全 3 回 講師：峰岸真琴、星泉及び COE 非常勤講師 1 名)

2002 年度

文部科学省主催「人・ことば・文化－ことばが消えるとき」「人・ことば・文化：海をこえて伝わったことばたち」衛星通信による連続講座（エルネット）(2002 年 12 月 全 2 回、講師：中山俊秀、菊澤律子)
東京外国語大学言語学・音声学研究室主催・本研究所後援「言語聴覚士に対する言語学・音声学の再教育」(平成 14 年度、文部科学省社会人ブラッシュアップ教育推進事業、2003 年 3 月 9 日、講師：峰岸真琴、報告書：「言語聴覚士に対する言語学・音声学の再教育」活動および調査研究成果報告書)

2003 年度

調布市文化・コミュニティ振興財団主催（担当：大学開放企画室)「現代社会における宗教と生活 I ――イスラーム世界に学ぶ多宗教、多民族共生の知恵」(11 月 6 日より全 4 回、講師：飯塚正人、黒木英充、西井涼子、近藤信彰)
小平市花小金井南港民会主催、(財) 中近東文化センター・ AA 研後援夜間講座「イスラム世界を学ぶ」全 10 回（10 月 1 日～ 12 月 3 日の各水曜、AA 研の担当講師：飯塚正人)
府中市生涯学習センター主催教養セミナー、AA 研後援「イスラーム概観」(講師：飯塚正人)

2004 年度

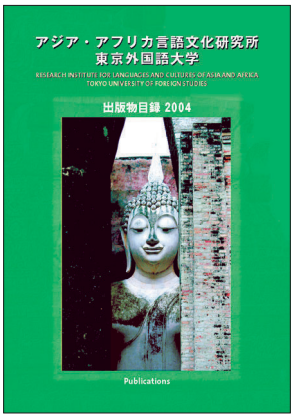
府中市生涯学習センター主催（東京外国語大学連携講座)「魅力あふれるアジアの言葉と人々 第 1 部～インドとアラブの言葉と人々」(10 月 6 日より全 4 回、講師：町田和彦、中谷英明、黒木英充、飯塚正人)
府中市生涯学習センター主催（東京外国語大学連携講座)「魅力あふれるアジアの言葉と人々 第 2 部～東南アジアの言葉と人々」(11 月 10 日より全 4 回、講師：澤田英夫、根本 敬、西井涼子、塩原朝子)

出版事業

本研究所では，言語研修，辞典編纂事業，個人研究，また共同研究プロジェクトによる研究の成果を出版物として公開しています。研究所の出版物は，著作者からの事前の文書による了解が得られている出版物に限り，「オン・デマンド出版」による頒布を行う予定です。

なお，出版物一覧については，別冊の『出版物目録』あるいは，ホームページの「研究所の刊行物」欄（http://www.aa.tufs.ac.jp/book/book.html）をご覧ください。

くわしくは研究所編集出版事務担当（editcom@aa.tufs.ac.jp）にお問い合わせ下さい。



- 逐次刊行物
- アジア・アフリカ言語文化叢書
- アジア・アフリカ基礎語彙集
- 言語研修テキスト
- 言語調査・語学教育関連資料
- 言語情報処理
- 地域・文化研究：東アジア
- 地域・文化研究：東南アジア
- 地域・文化研究：南アジア
- 地域・文化研究：西アジア
- 地域・文化研究：アフリカ
- 地域・文化研究：その他の地域
- 地域・文化研究：広域

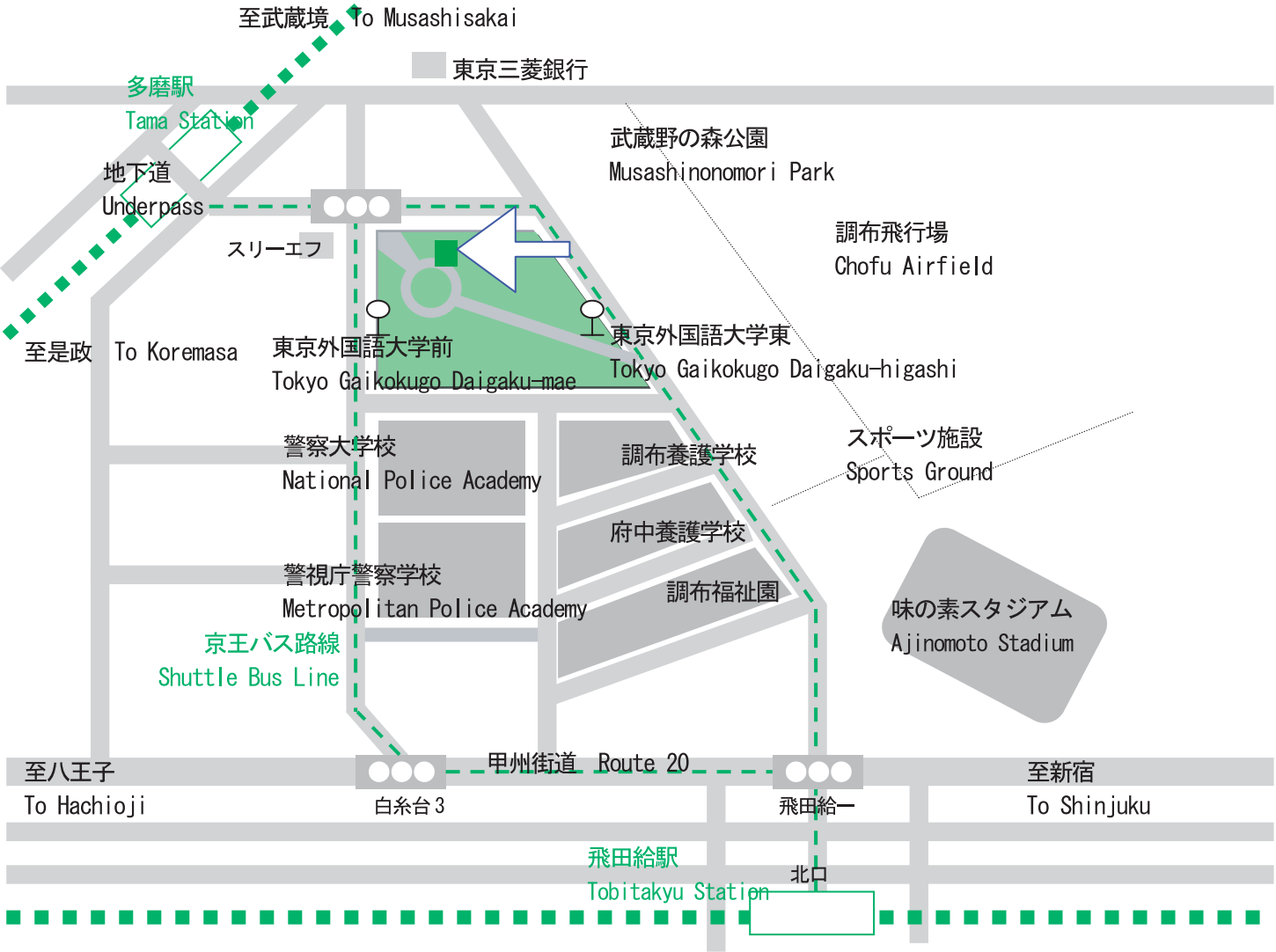
ホームページ

本研究所では，平成６年度からホームページを開設しています。本研究所の研究会の案内や研究活動の詳細，研究成果の出版物一覧など，最新の情報を提供しています。どうぞご一覧ください。なお，個々の所員によるホームページも本研究所のホームページからアクセスできます。また，本要覧７～13ページにある「研究スタッフ」欄に掲載されたアドレスもご参照ください。

ホームページのアドレス：http://www.aa.tufs.ac.jp/



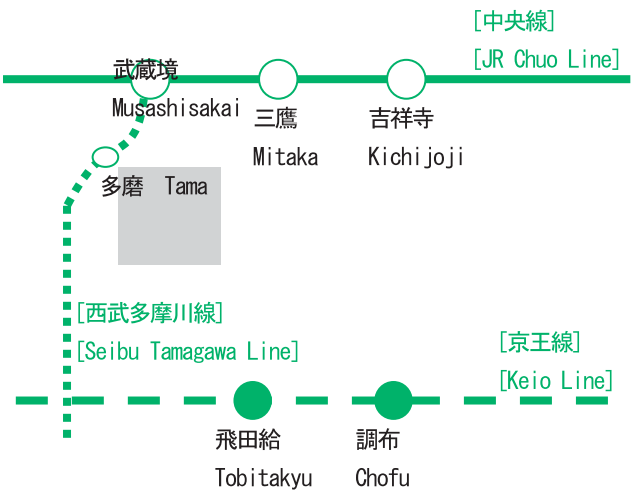
交通案内



【交通機関】

・中央線「武蔵境」駅から西武多摩川線に乗り換え
　→西武多摩川線「多磨」駅より徒歩５分

・京王線「飛田給」駅より循環バス
　東京外国語大学東停留所　下車徒歩０分（バス所要時間約６分）
　東京外国語大学前停留所　下車徒歩０分（バス所要時間約 10 分）



アジア・アフリカ言語文化研究所
東京外国語大学

〒183-8534　東京都府中市朝日町 3-11-1
TEL：042-330-5600　　FAX：042-330-5610